

KUBOODOU SITE

久保御堂遺跡

—平成7年度県営圃場整備事業古田地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

1997. 3

茅野市教育委員会

KUBOODOU SITE

久保御堂遺跡

—平成7年度県営圃場整備事業古田地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

1997. 3

茅野市教育委員会



(1) 連峰上空風景 (美濃から)

序 文

久保御堂遺跡は平成7年度県営圃場整備事業古田地区の施工に伴い、記録保存を前提に緊急発掘調査を茅野市教育委員会が実施したものであります。

久保御堂遺跡は当初採集された遺物も少量で、規模等に不明確な部分がありましたが、今回の発掘調査によりその全貌が明らかになり、遺跡の性格が明確になりました。

発掘調査の結果、平安時代の竪穴住居址が5軒と、縄文時代の狩猟に用いられた落とし穴が17基と土坑が14基確認されました。八ヶ岳西南麓において近年多くの平安時代の集落が検出され、平安時代における山麓部の開拓の状況が徐々に解明されつつあります。今回調査された久保御堂遺跡の集落も、こうした開拓の村の一つと捉えることができ、古田村の成立ちを探る上に貴重なものです。落とし穴を用いた狩猟の場の発見は、昭和40年に宮坂英次先生により蓼科高原城之平遺跡においてなされ、落とし穴の構造や落とし穴が群在する点などから、集団による狩猟が行われていたことが想定されています。今回久保御堂遺跡より検出された落とし穴も、同種類のものが規則的に並ぶ点などから、城之平遺跡と同様な集団の狩り場であったことが明らかになり、当時の狩猟活動の状況を復元する上には重要な資料を得ることができました。

久保御堂遺跡に隣接する師岡平遺跡などからも落とし穴群が検出されており、この古田の台地が狩猟の適地として頻繁に利用されたことがうかがえました。また、平安時代に久保御堂遺跡が開拓の村として作られ、周辺にも同様な村が点在しており、現在の八ヶ岳西南麓村の原形になったものと考えることができ、この地域における生活領域の復元や遺跡間の相互関係を解明することに貴重なものと言えましょう。

古田地区における埋蔵文化財の調査は平成6年度の上の平遺跡に始まり、平成7年度の久保御堂遺跡・平成8年度師岡平遺跡の調査と3か所の遺跡の記録保存がなされ、古田地区における重要な歴史的情報を得ることができました。これらの情報を基に古田地区における地域史が再編され、当地における縄文時代や平安時代のより具体的な生活の様子が解明されることでしょう。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会、地元地権者、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市土地改良課の皆様のご理解とご協力、調査ならびに作業にあられた皆様のご苦労により、無事終了できましたことを心からお礼申し上げます。

平成9年3月

茅野市教育委員会
教育長 両角 徹郎

例 言

1. 本書は、長野県諏訪地方事務所長大西一郎と茅野市長矢崎和広との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財調査室が実施した平成7年度県管圃場整備事業古田地区に伴う、長野県茅野市久保御堂遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、長野県諏訪地方事務所土地改良課よりの委託金と、文化財国庫補助平成7年度国宝重要文化財等保存整備費補助金市内遺跡発掘調査並びに県費補助金平成7年度文化財保護事業補助金市内遺跡発掘調査、市費を得て、茅野市教育委員会が平成7年度に実施した。調査の組織等の名簿は第I章第1節5、調査の体制として記載してある。
遺物整理・報告書刊行は、長野県諏訪地方事務所土地改良課よりの委託金と、文化財国庫補助平成8年度国宝重要文化財等保存整備費補助金市内遺跡発掘調査並びに県費補助金平成8年度文化財保護事業補助金市内遺跡発掘調査、市費を得て、茅野市教育委員会が平成8年度に実施した。
3. 発掘調査は平成7年10月24日から11月27日まで行い、出土品の整理及び報告書の作成は平成8年5月から平成9年3月まで茅野市文化財課において行った。
4. 発掘調査から本書作成までの作業分担、執筆分担等は第I章第1節2・4に記してある。
5. 本報告に係る出土品・踏記録は茅野市教育委員会文化財課で収蔵保管している。

凡 例

1. 調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第VII系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。
2. 本報告書に掲載の住居址・土坑の遺構実測図は1/60、カマド詳細図は1/40、土器・陶磁器類、大型石器は1/3、小型石器1/1の縮尺とした。
3. 遺物胎土の色調については『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。
4. 挿図中におけるスクリーントーンは焼土、須恵器、黒色土器、灰釉施胎部、長石釉施胎部、鉄釉施胎部を示した。

目 次

序 文

茅野市教育委員会教育長 両角 徹郎

例 言・凡 例

第I章 発掘調査の概要	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過	1
1. 調査に至るまでの協議	1
2. 発掘調査の方法とその経過	2
3. 調査日誌（抄）	3
4. 遺物整理・報告書の作成	4
5. 調査の体制	4
第2節 発掘された遺構・遺物の概要	5
1. 遺構の概要	5
2. 遺物の概要	5
第II章 遺跡の概観	7
第1節 遺跡の位置と環境	7
1. 遺跡の立地と地理的環境	7
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	9
1. 遺跡周辺の遺跡とその地理的位置	9
2. 遺跡の研究史	11
第III章 遺跡の層序	13
第1節 調査区の基本的層序	13
1. 土層の基本的な堆積状況	13
第IV章 検出された遺構と遺物	14
第1節 平安時代の遺構と遺物	14
1. 竪穴住居址	14
2. 平安時代の遺構の構成	26
第2節 縄文時代の遺構	29
1. 土坑	29
第3節 縄文時代・平安時代・中世・近世の遺物	37
1. 縄文時代の遺物の概要	37
2. 平安時代遺物の概要	38
3. 中世遺物の概要	39
4. 近世遺物の概要	40
第V章 調査の成果と課題	45
第1節 久保御堂遺跡の落し穴状土坑について	45
第2節 平安時代における久保御堂遺跡について	47
第VI章 結 語	49
図 版	

第 I 章 発掘調査の概要

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過

1. 調査に至るまでの協議

遺跡確認に至るまでの経過 本遺跡は平成7年までは未周知の遺跡であったが、県営圃場整備事業古田地区の対象地となった時点で、地元地権者より同地区に土器片等の散布することが連絡された。周辺が広域である点や、採取された遺物が小量なこともあり、その規模や時期・性格が不明で、特に遺跡の広がりについては不明な部分が多かった。

3月に遺跡確認のために周辺範囲を表面採集を実施した。その結果台地先端部と南側斜面を中心に縄文時代中期初頭土器片、黒曜石剥片、平安時代黒色土器片、中世後半大塚期陶器片が採集され、縄文時代・平安時代・中世の複合遺跡であることが確認された。この成果を基に文化庁長官宛に5月17日付7教文第10-1号により遺跡発見届を提出し、5月26日付7教文第6-11号をもって埋蔵文化財包蔵地の認定を受け、遺跡番号313として市遺跡に登録した。

試掘調査とその成果 本遺跡はその規模・内容が不明な遺跡であった。地形的な観点から考えると、分断する谷を持たない広大な山麓部であった点や、遺物採取の可能な範囲が限定されていたこともあり、遺跡の限界についてを現況より把握することは不可能に近い状況にあった。そのために遺構の分布状態の把握、旧地形の復元等を目的に試掘調査を実施した。

試掘調査はトレンチを表面採集の際に遺物の採集された地点を重点的に、台地を切るように幅2mのトレンチを4m～6m置きに設定し行った。試掘の結果、畑地部の層厚は15cm～25cmであり耕作の攪乱がローム面まで至っており、遺物の包含層の抽出、生活面の把握を行うことはできない状態であることが判明した。遺構は住居址が台地西側先端部に、縄文時代中期初頭のもの、平安時代のものが集中する傾向と、この群に相対するように台地東側に平安時代の住居址が散在していることが確認された。この他に土坑が台地全面に散在し、これら遺構の検出された範囲を遺跡の主体部とすると、その面積は約9,300m²を測る。

本調査に至るまでの協議経過と贈事務 平成5年8月12日に行われた平成6年度圃場計画地内の遺跡の現地踏査が(諏訪)地方事務所(土)改良課・茅野市農業基盤整備課・茅野市教育委員会文化財調査室において行われた。その結果記録保存の方向が決定されたが、遺跡の面積が不明確なために試掘調査を実施し、面積をしばらくは必要が指摘された。

再度7月17日に行われた県営圃場整備事業古田地区に伴う埋蔵文化財の保護協議において、平成7年度の全体調査総量との関連等より本遺跡を調査することができるかどうか懸案事項となった。試掘調査の結果遺跡面積が広大であったために、全面を記録保存することは他の事業量の関係から不可能であり、設計変更を含めた協議がなされたが、遺跡全体に盛り土を行うことは土が確保できないことなどより、切り土範囲を最小限に留め、切り土される範囲についての記録保存を実施することとした。また、調査は圃場の工事と並行して行うこととし、遺物整理、報告書の刊行は平成8年度に実施することとした。

この協議結果に基づき、平成7年11月15日付7教文第7-10-5号、県営圃場整備事業に係る茅野市内の埋蔵文化財の保護について(通知)が長野県教育委員会より提出された。その内容は事業に先立ち3,500m²以上の発掘調査を実施し、記録保存を図る。発掘調査に係る経費は、事業主体者が負担する。ただし、経費のう

ち農家負担分（12％）については文化財保護側が負担する。この計画は総額900,000円（農政事務局負担792,000円、文化財負担108,000円）で事業を行い、発掘調査は茅野市教育委員会に委託するというものであった。

平成7年度の圃場関係の調査計画については、平成6年12月平成7年度文化財関係補助事業計画を提出して事業に備えたが、本遺跡の場合平成7年度の事業が進行中に急遽調査計画が生じたために、年度途中で全体計画を見直し、変更申請を提出し、本事業を実施した。

平成7年11月15日付7教文第7-10-15号、県営圃場整備事業に係る茅野市内の埋蔵文化財の保護について（通知）を受け平成7年10月5日付7教文第62-8号、平成7年度県営圃場整備古田地区久保御堂遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を諏訪地方事務所長大西一郎と取り交わし、文化財補助金申請等事務・発掘諸法令事務を下記の通り行った。

発掘調査に係る文化財補助金申請等事務経過

- 平成7年6月7日 7教文第1号 平成7年度文化財関係国庫事業について（通知）
- 平成7年6月16日 7教文第2号 平成7年度文化財保護事業補助金の内示について（通知）
- 平成7年6月22日 7教文第20-2号 平成7年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
- 平成7年6月30日 7教文第23-1号 平成7年度文化財保護事業補助金申請書提出
- 平成8年3月11日 7庁保伝第1号 平成7年度文化財関係国庫補助事業の変更交付決定について（通知）
- 平成8年3月11日 7教文第2号 平成7年度文化財保護事業補助金の変更交付決定について（通知）
- 平成8年3月25日 7教文第118-5号 平成7年度国宝重要文化財等保存整備費補助金実績報告提出

発掘諸法令事務の経過

平成7年5月17日 7教文第10-3号 久保御堂遺跡埋蔵文化財発掘通知（57条3第1項）の提出
平成7年8月8日 7教文第46-1号 久保御堂遺跡埋蔵文化財発掘通知（98条2第1項）の提出
遺物整理・報告書作成については平成8年3月31日付7教文第7-10-5号、県営圃場整備事業に係る茅野市内の埋蔵文化財の保護について（通知）を受け平成8年4月8日付8教文第1-7号、平成8年度県営圃場整備古田地区埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を諏訪地方事務所長小林俊規と取り交わし、文化財補助金申請等事務を下記の通り行った。

遺物整理・報告書刊行に係る文化財補助金申請等事務経過

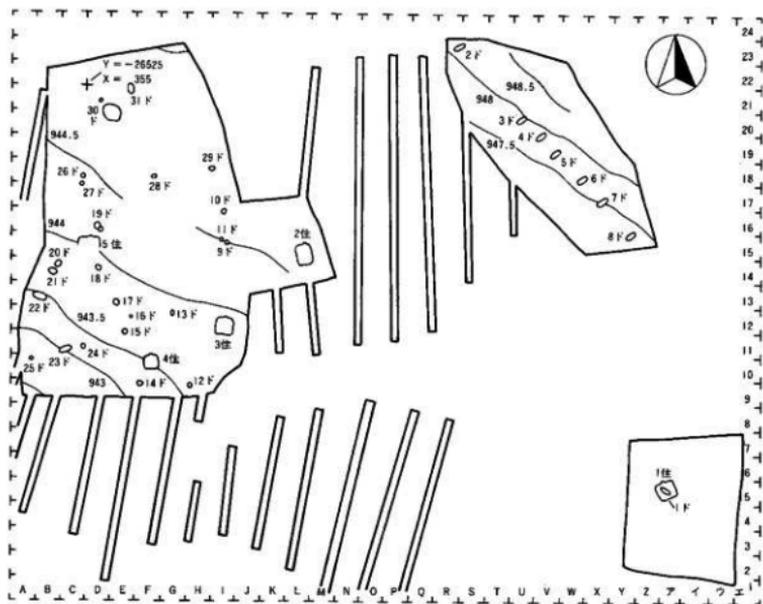
- 平成8年5月16日 8教文第1号 平成8年度文化財関係国庫事業について（通知）
- 平成8年5月16日 8教文第2号 平成8年度文化財保護事業補助金の内示について（通知）
- 平成8年5月30日 8教文第17-2号 平成8年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
- 平成8年6月12日 8教文第22-2号 平成8年度文化財保護事業補助金申請書提出
- 平成8年8月9日 7庁保伝第7号 平成8年度文化財関係国庫補助事業の交付決定について（通知）
- 平成8年9月2日 8教文第225号 平成8年度文化財保護事業補助金の交付決定について（通知）

2. 発掘調査の方法とその経過

調査区の設定と発掘調査の方法 試掘調査により遺構は台地全面に点在していることが把握された。試掘トレンチにより確認された遺構の分布を基に調査区範囲を決定し、表上の除去を重機により行ったが、協議により埋め戻し保存される部分については調査区より除外した。

遺構が試掘結果よりもかなり広がり散在していたために、当初予定していた調査範囲約3,500m²より調査区は広がり最終的には4,682m²の調査となった。

発掘区内のグリッド設定は、公共座標 $X = -355$ 、 $Y = -26525$ を基準軸とし、この交点より5mピッチのグリ



第1図 調査区と遺構全体図 (1/100)

ットを設定した。ベンチマークは公共座標の交点に945.746mを設定した。

発掘調査の方法と経過 試掘調査により遺構は台地全面に点在するように土坑が群をなし存在することが確認されていた。調査は工事工程等の関係から遺跡全面について実施することができず、切り土工法部分を極力減らし、遺構の集中する南側斜面部を埋め土工法を用いることで、調査面積を最低限に押さえた。表土除去については、工事と同時並行に実施し調査期間の短縮を図った。発掘調査は10月24日より開始し、遺構の遺存状態が悪かったために短期で終了できたが、遺構区面等の作業が思うようにはかどらず、最終的に現場における作業が終了したのは11月27日であった。

遺構測量 遺構測量は平板測量を基本としたが、カマド石組み等の詳細図については一部に造り方測量図を平板測量図と合成した。また、土坑の断面については現場において作図作業と、レベル測量を併用して行った。なお、発掘現場における諸記録は守矢昌文、牛山徳博、塩原博子、篠原りか子、平尾弘子、三宅三重子、宮坂ちよ江、宮坂ひとみが携わった。

3. 調査日誌 (抄)

- 10月23日 発掘調査に先立ち機材準備と点検を行った後、機材を遺跡に搬入する。
- 10月24日 本日より発掘調査に入る。土坑の半割作業とセクション図作成。土坑・住居址の掘り下げを行う。
- 10月25日 掘り上がった遺構の写真撮影等を行う。
- 10月26日 遺構測量を開始する。
- 11月27日 遺構全体図を製し、本日で調査を終了する。

4. 遺物整理・報告書の作成

遺物の整理 遺物整理・報告書作成は他の事業量等との関連から平成7年度に実施せず、本格的に開始したのは、平成8年度に入ってからである。調査が遺跡の主体部から外れていたことや、住居址の上面部が耕作により攪乱され、遺存状態が悪かったこともあり、出土した遺物は少なく、完全に復元された土師器はなく、遺物の筋において記述したものはその全てが図上において器形復元したものである。また、調査の方法で重機により耕作土を除去しことから、遺物包含層の状況について詳細に観察することができなかった。

表面採集による遺物も含めると、縄文時代早期押型土器片1、縄文時代中期初頭土器片3、黒曜石石鉄未製品1、ドリル1、両極打法により生じた剥片3、黒曜石原石2、砕片11、剥片16、打製石斧3、横刃型石器1、磨石2、平安時代土師器環片23、甲斐型環片1、黒色土器環片37、黒色土器碗片1、皿片9、小型燧片44、長調燧片363、武蔵型燧片16、須恵器環片4、甕片7、灰釉陶器碗片15、中世内耳土器片29、大塚期鉄釉碗片5、鉄釉卍片1、灰釉丸碗片4、志野丸碗片1、志野丸皿片2、常滑窯燧片2、明青磁瓶片2、火打石1、近世瀬戸窯本業地期灰釉碗片1、鉄釉碗片1、染付碗片1、染付広東碗片1、肥前染付磁器碗片3、常滑窯急須片1が検出されているに過ぎず、遺物の洗浄等の整理は短期間で終了した。注記の略号は遺跡番号の313を冠し、遺構名、地点・層位の順とした。

遺構平面図等の整理 遺構平面図は平板測量により得られた1/20の原図を用いた。遺構全体図1/100の全体図は現地において平板測量により作成した。1/1,000地形図への合成は1/20の原図を縮小編集し作成した。遺構断面図については基本的には現場において作成したが、遺構のレベル測量成果を基に作成したものもある。セクション図は遺構の重複関係、遺構の埋没状況の把握等を目的に行った。なお、坑底ビットについては規模等の関係からセクション図に取り込むことができなかったが、坑底ビットを掘り下げる際に土層の堆積状態について観察を行った。尚、原稿執筆は守矢が担当した。

5. 調査の体制

調査主体者 両角昭二 (茅野市教育委員会教育長 平成7年4月1日より9月30日)

両角徹郎 (茅野市教育委員会教育長 平成7年10月1日より)

事務局 宮下安雄 (茅野市教育委員会教育次長)

発掘調査時

両角英行 (文化財調査室長) 鶴飼幸雄 (文化財調査室係長) 守矢昌文 小林深志 大谷

勝己 功刀 司 小池岳史 百瀬一郎 小林健治 柳川英司 大月三千代

遺物整理・報告書刊行時

矢嶋秀一 (文化財課長) 鶴飼幸雄 (文化財課文化財係長) 守矢昌文 小林深志 大谷勝

己 功刀 司 小池岳史 百瀬一郎 小林健治 柳川英司 大月三千代

調査担当者 守矢昌文 調査補助員 牛山徳博

発掘調査・整理作業協力者 塩原博子 藤原リカ子 平尾弘子 三宅三重子 宮坂ちよ江 宮坂ひとみ

基準点測量委託：株式会社両角測量 遺物測量委託：株式会社東京航業研究所

発掘調査期間中、遺物整理期間中諏訪地方事務所土地改良課並びに、市田区園場整備委員会を始め地権者の方々にご助力頂き、調査を円滑に進めることができた。謝意を表し明記したい。長野県教育委員会文化財保護課課長文化財係指導主事原 明芳氏をはじめ下記の方々より有益なご指導・ご助言を頂いた。記して感謝を申し上げます。

宮坂光昭 武藤雄六 青木正洋 五味裕史 小安和順 中西真也 齋藤 弘 宮坂 清

第2節 発掘された遺構・遺物の概要

1. 遺構の概要

検出された遺構の概要 検出された遺構は平安時代竪穴住居址、土坑とロームマウンドだけである。土坑をその形状より観察すると、落し穴とすべきものと、用途の不明な「穴」の2者が認められる。本遺跡から検出された遺構はその性格上から直接遺構内より時期を示す遺物等の資料を検出することはできなかった。しかし、検出された遺構の構造等から推測すると、検出された遺構は縄文時代に帰属するものと考えられる。落し穴が群をなして一定の配列を持ち検出されたことにより、当時の特徴領域を考える上に重要な所見が得られた。

平安時代の竪穴住居址は5軒を調査し、この他に試掘調査により2軒の住居址が検出されており、平安時代において、ある程度まとまった単位のムラが構成されていたことが窺えた。

検出された遺構の時期とその構成 検出された遺構特に落し穴はその形状等より縄文時代に帰属するものと思われるが、詳細な時期を示すような根拠は得られてはいない。しかし、落し穴には様々な類型のものが認められことなどより、一時期に落し穴が構築されたのではなく、ある程度の時間幅の中で構築されたものと理解できる。

平安時代の竪穴住居址は調査された5軒についてはカマドの構築方向が北カマドと一定である点や、検出された土師器等の在り方より同時期のものと考えられ、平安時代のムラの様相を窺うことができた。

遺構名の取扱い 土坑については地下に掘り込まれた「穴」を指し、小竪穴・土塚と総称されている遺構である。土坑と一括した内には落し穴、貯蔵穴等が含まれており、単純に土坑=墓穴ではなく、土坑は多岐に亘る「穴」を総称している。落し穴については土坑群内より諸属性より分類し、土坑とは分離して取扱うべきかもしれないが、今回は現場での遺構の取扱いに準じた。

2. 遺物の概要

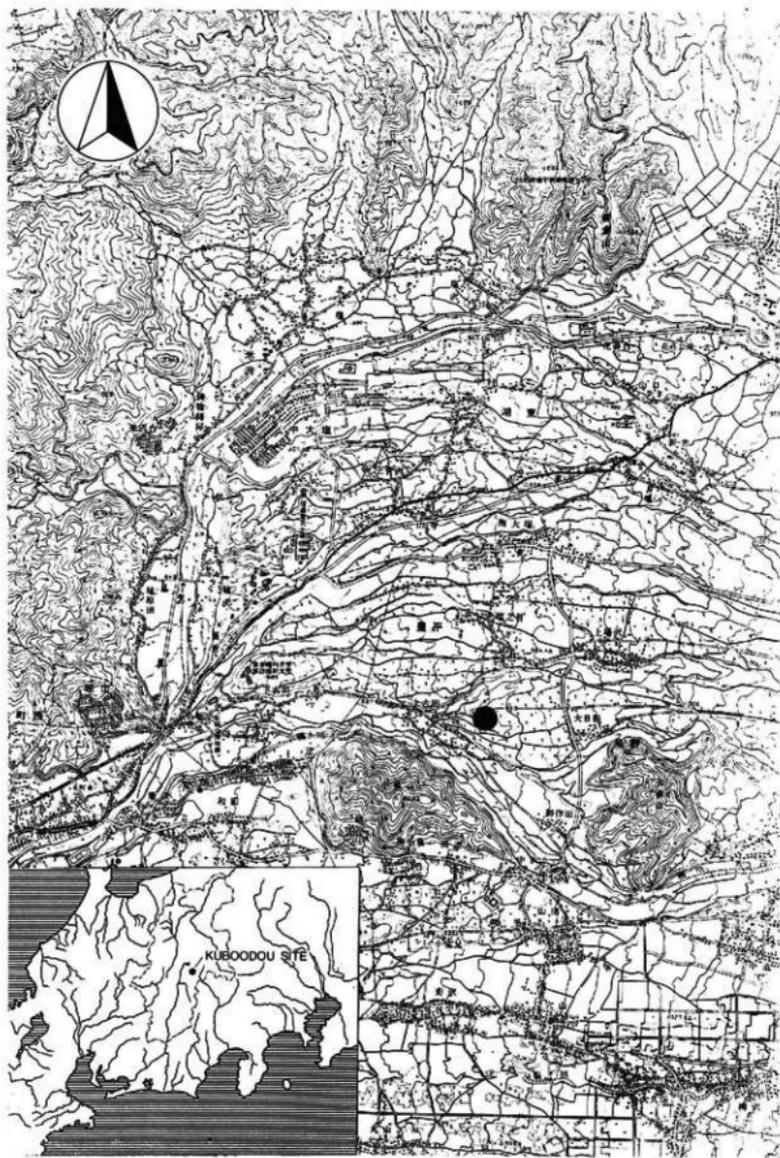
検出された遺物の概要 検出された遺物の量は平安時代の集落の割には、その量は少なく住居址内土器等の検出はない。検出された遺構内出土土器は総量にして3,177.5gを測った。これに混在する形で縄文時代土器・中世陶磁器・近世陶磁器が検出されている。

縄文時代の遺物 遺物の主体をなすものは縄文時代早期前半の押型文資料と中期初頭土器で、これらの時期に伴うと思われる黒曜石刮片や打製石斧である。また、平安時代住居址より検出された磨石は形状等より縄文時代のものの転用と考えられよう。

平安時代の遺物 本遺跡の遺物の中心を為すもので、住居址内を中心に土師器環・甕、須恵器環などがセットとして検出されている。セットの特徴は灰軸陶磁器を含まない点にあり、土器群の構成より9世紀後半から10世紀前半に帰属するものと考えられる。

中世・近世の遺物 中世に帰属する資料は大濠期丸碗・丸皿等で、施軸には灰軸・長石軸が認められた。これらの資料は16世紀後半に帰属するものと考えられ、近接する中世村落址である師岡平遺跡との関連を考えられる資料である。

近世に帰属する資料は染付陶磁器片等瀬戸・美濃窯系陶磁器片が得られている。これらの資料は直接本遺跡の遺構に関わるものではなく、近世の耕地造成や耕作に伴って耕作地に混入したものと捉えることができ、近世の八ヶ岳西南麓における開発の状況を探る上に貴重な資料と言えよう。



第2図 久保御堂遺跡位置図 (1/37,500)

第II章 遺跡の概観

第1節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の立地と地理的環境

遺跡の位置 久保御堂遺跡は長野県茅野市豊平9367-1番地他(上古田)に所在する。遺跡の位置する上古田地区は市域の南東に位置し、久保御堂遺跡はJR中央本線茅野駅から東方向に約4.5kmのちょうど八ヶ岳の南西麓に位置し、遺跡の位置する台地南西直下に豊平上古田の集落が位置する。

遺跡の地理的環境 久保御堂遺跡は八ヶ岳の火山活動により形成された台地上に位置している。台地は畑地として利用されているが、大きくは改変されておらず、従来の尾根状台地の様相を色濃く残している。また、南側に隣接する台地と細長い谷を挟んで典型的な長峰状の姿を遺存している。

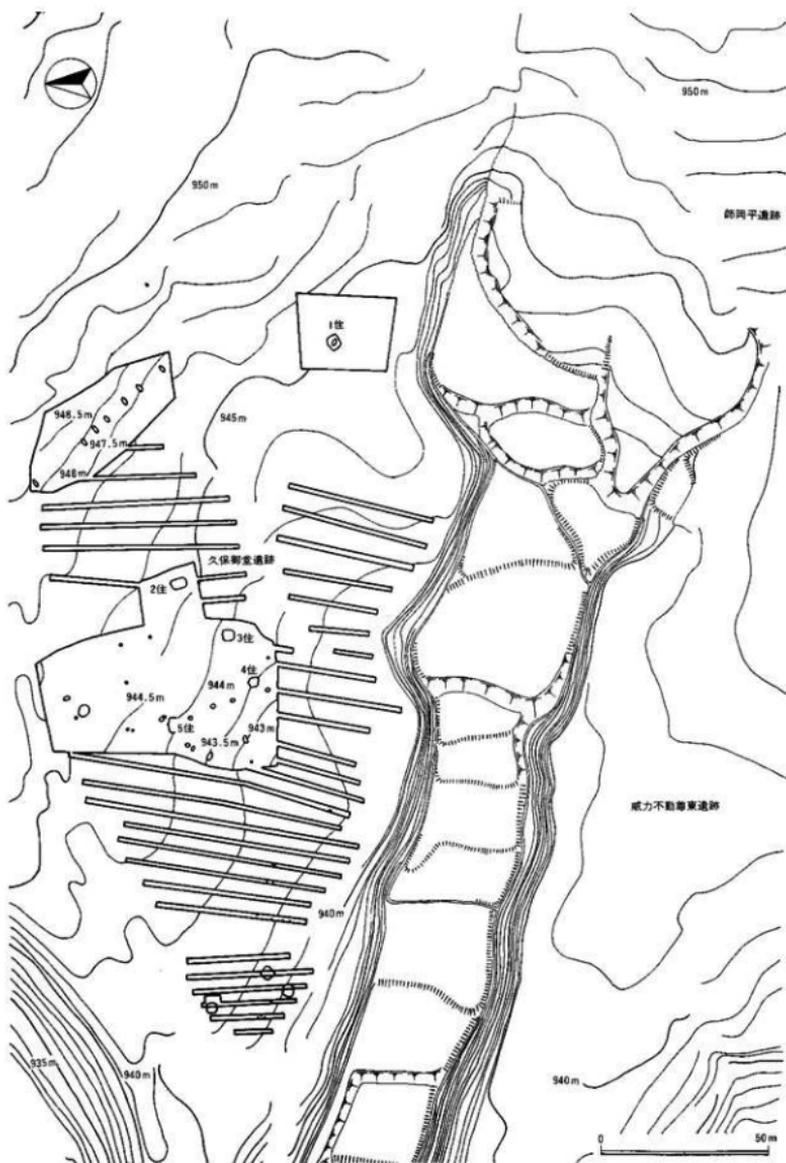
本遺跡の立地する台地を巨視的に見ると、八ヶ岳のほぼ中央部に位置する天狗岳を起源とする、新八ヶ岳の活動期の噴出物により形成された、第II段丘面の南側端が流れ下った断丘末端に位置している。台地南側に流れる柳川を隔ててそれ以南の南八ヶ岳西南麓の古八ヶ岳期の段丘と対峙し、柳川の流れる部分は深い谷となり、台地と河川の間には河川段丘が広がっている。本遺跡の立地する台地の東側には第3紀花崗岩類の隆起による大泉山が位置し、そのために本遺跡の立地する台地範囲は大泉山の部分で隔絶された状態となっている。

本遺跡の立地する地形は槻木地区より大きく延びる台地の末端部に該当するが、大泉山により分断されたような状態となっている。本遺跡の立地する台地は大日影葉落下より分岐し始め、大きく二つの台地となる。なお、台地内には侵食によると思われる小規模な入り組み谷が入り込んでいるが、この入り組み谷は畑地造成に伴い埋立てが行われ、旧態を明確に遺存してはいない。本遺跡と南側に隣接する御調平遺跡間には割合規模の大きな谷が入り込んでいる。この谷は典型的な長峰状の尾根間に見られるもので、谷内には自然湧水が認められ、現在では水田用として利用されているが、この湧水は生活用水として利用するのにも遜色のないものであり、遺跡内の生活用水として利用されたものであろう。また、谷内は湿地状を呈しているために動物のヌタ場であった可能性も考えられる。本遺跡の立地している台地上と谷部の底面との比高差は約8mを測り、谷と接する台地の南側斜面は切り立った崖状となる。

本遺跡の立地している台地は現状の表面観察においては、大きく広い台地としか捉えられないような地形であったが、実際に畑地により改変された部分を剥ぎ取ってみると、遺跡周辺の原地形はかなり複雑な地形を呈していたことが把握できた。それによると、台地を横断するように小規模な谷が入り込み、埋もれ谷状の地形を形成している。調査の結果明瞭な二分割の状態ではなかったが谷を挟んだ集落状態であり、南西側に入り込む浅い谷をかなり意識して展開しているような傾向が窺える。

割合規模の大きな台地に遺構が、散在する形で検出されているために全体の面積は南北方向約93m、東西方向約100m、面積約9,300m²の広い範囲を想定できるが、遺物の散布状況や遺構の分布状態を考慮すると、遺構の分布密度は過疎の状態であり、遺構の密集が認められず遺構間の重複などを認めることはできなかった。

南側に位置する規模の割合大きな入り組み谷に求められる湧水や、台地が南側に緩やかな斜面を形成する点などを考慮すると、本遺跡の立地する範囲は生活条件の整った地域であると捉えられるが、その割には集落規模が小規模で散在的である点に興味深いものがある。



第3図 周辺の地形と遺構分布 (1/1,500)

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

1. 遺跡周辺の遺跡とその地理的位置

周辺の遺跡の地理的位置 本遺跡の立地する古田地区は、東西に流下する柳川に沿って形成された低位段丘面上に立地している。この段丘に接するように中位段丘面が発達する。北八ヶ岳西麓は南八ヶ岳南西麓に比べると全体として、火砕流の堆積が複雑となっており、笹原面（広見面）・南大塩面・芥ヶ沢面・上川面などに分かれている。本遺跡の位置する箇所は笹原面の一部に位置し、かなり複雑な火砕流による尾根状の段丘が発達している。また、この段丘より突出して第三紀花崗岩類よりなる大泉山・小泉山がそびえている。本遺跡の立地する地域は、割合視界が遮断されることのない八ヶ岳西麓においてこの岡山塊に挟まれて、視界が遮られたような小空間を形成している。

本遺跡周辺に立地する遺跡 本遺跡の立地する北八ヶ岳西麓には、東西方向に走行する分断された台地が形成され、台地上には国特別史跡尖石遺跡等数多くの縄文時代を中心とする遺跡が点在している。

本遺跡周辺は豊平地区においてもある程度のまとまりを有していることが指摘されている。本遺跡周辺には南東部より上の平遺跡(166)・師岡平遺跡(78)・威力不動尊東遺跡(210)が立地している。これらの遺跡の中で、上の平遺跡と師岡平遺跡は深い谷を隔てて隣接し、師岡平遺跡と威力不動尊東遺跡は同一台地に位置し、このような立地環境は遺跡群の相互関係をつかむために重要な地域としての認識がなされている。上の平遺跡・師岡平遺跡は割合古くより遺跡としての認識がなされており、上の平遺跡では小規模ながら発掘調査も実施され、遺跡の内容が若干ではあるが把握されつつある。本遺跡はこれらの遺跡と谷を隔てて隣接しているものの、個々の遺跡の時期や位置関係等から大きな遺跡群を形成していると思定することができ得る。群を構成している遺跡の概要について記述し、本遺跡から検出されている落し穴・平安時代・中世について遺跡間の関連性についても考えてみたい。また、上古田・御作田遺跡群(久保御堂遺跡・師岡平遺跡・威力不動尊東遺跡・上の平遺跡)の周辺に隣接する遺跡群である槻木遺跡群(稗田頭A・B・C遺跡・中原遺跡、上見遺跡、梵天原遺跡)や、下古田・塩之目遺跡群(梨ノ木遺跡、塩之目尻遺跡)等についても遺跡群の相互関係の観点から概略を記述したい。

上の平遺跡 上古田集落の上部に位置する御作田集落を望む尾根状台地に位置する。遺跡の立地する台地は割合複雑な形状を示している。台地西側先端部は大きく分岐し、深い谷を挟んで遺跡は広がる。また、近接する大泉山の裾部に入り込む入り組み谷に面した南側斜面にも遺跡の広がりが認められ、かなり広範囲に亘って遺跡が広がることが確認されている。

上の平遺跡が学会に最初に報告されたのは、宮坂英次氏が昭和11年にミネルヴァ第1巻第7号に本遺跡より採集された元祐通寶の採集記録であり、この遺物は喜田貞吉氏により採り上げられミネルヴァ論争の資料となっている。上の平遺跡の発掘調査は昭和22年に農道改修作業に伴い宮坂英次氏の指導により、豊平中学校の生徒が社会科の学習をおかねて発掘調査が実施され、縄文時代中期中葉新道式期の竪穴住居址1軒と藤内I式期竪穴住居址1軒が確認されている。また、住宅建設に伴い昭和62年に縄文時代中期中葉竪穴式期竪穴住居址1軒、平成元年に平安時代後半竪穴住居址1軒、縄文時代中期中葉竪穴式期竪穴住居址1軒が検出されており、縄文時代中期中葉の大規模な集落であることが判明している。平成6年に東宮園場整備事業に伴い南側斜面の一部が発掘調査され、縄文時代前期竪穴住居址3軒、土坑86基、平安時代後半竪穴住居址1軒が検出されたことより、本遺跡がかなり広い分布域を有していることが把握された。平安時代後半の竪穴住居址は2軒だけの検出ではあるが、遺構の分布域が広い点などを考慮すると住居址が密集する集落ではなく、

散在型のものであると考えられる。土坑内に落し穴と思われるものが谷内に1基検出されているが、他の部分からは検出されておらず、大きな群を構成しているものとは考えられない。

久保御堂遺跡との関連を考えると、落し穴については詳細な時期決定はできないが、落し穴の平面プランや構造差、構築位置より久保御堂遺跡のものとは関連性は少ないものと思われるが、しかし、上古田・御作田地域の広域に亘って落し穴列の狩り場であったことが窺える。検出された2軒の平安時代後半の竪穴住居址は出土遺物より10世紀後半の時期を与えることができ、久保御堂遺跡よりも後出集落であると考えられる。中世については元祐通寶の採集と、平成6年度調査の際に検出された山茶碗片だけで詳細なことは不明ではあるが、中世にこの地が利用されたことが窺える。

師岡平遺跡 上の平遺跡とは大口影川が開削する深い谷を隔てた隣接する広い幅を持つ台地に位置する遺跡である。古くより縄文時代前期末、中期後半の土器が採集されていたが、遺跡内容は不明のままであった。⁶⁵平成7年度に県営園場整備事業に先立ち試掘調査を実施され、縄文時代中期の集落と、中世の集落が確認されている。縄文時代の集落は台地東側群と西側群に大きく2群に分割されるようで、中期前半から中期後半にかけてのものが重複して検出されている。また、落し穴と思われる平面プランを有する上坑が試掘段階で検出されている。この土坑は台地を横断するように規則的に数基配されており、群を構成するものと考えられる。⁶⁶平成8年度に実施されている本調査においても久保御堂遺跡と谷を挟んで隣接する台地斜面部より数基の落し穴が検出されている。平安時代の遺構は検出されていないが、出土遺物内に10世紀後半に帰属する灰釉陶器碗片が認められ、該期の遺構が存在するものと考えられる。

久保御堂遺跡との関連性を窺わせる要件は落し穴、平安時代遺物、中世遺物であることができる。落し穴はその配列が久保御堂遺跡のものと類似する点や、構造・規模等が類似する点より一連性のあるものと捉えることが可能であろう。平安時代については師岡平遺跡も久保御堂遺跡よりも後出するものと考えられる。中世は大規模な集落で13世紀から16世紀の遺物が検出されており、久保御堂遺跡でも16世紀の遺物が得られており、なんらかの関連を両者が有していたものと考えられる。

威力不動尊東遺跡 師岡平遺跡と同一の台地に立地し、師岡平遺跡の西側下方に近接する。縄文時代前期末・中期初頭・中期後半の上器片が採集されており、⁶⁷平成7年度実施の試掘調査においては縄文時代中期初頭の竪穴住居址が5軒検出されている。威力不動尊東遺跡はその立地環境等より師岡平遺跡の一時的な居住の場として付随していたものと推定されている。

久保御堂遺跡と周辺の遺跡との関連性 上の平遺跡や師岡平遺跡・威力不動尊東遺跡との関連を直接窺えるような遺構や遺物は得られてはいないが、本遺跡の遺構の主体となる落し穴と平安時代の遺構・中世遺物に着目し、これらの検出されている遺跡を列記し、その関連性について考えてみたい。

落し穴は上の平遺跡・師岡平遺跡から検出されている。上の平遺跡では浅い谷部の低い部分に1基が検出されているだけで、群を構成するような連続性のあるものではない。

師岡平遺跡のものについては、居住域からやや離れた部分である遺跡南西端に1列と久保御堂遺跡と師岡平遺跡を隔てる谷を挟んだ北側斜面に1列と台地中央部に検出されており、これらは全て台地を横断するように、列を成し構築されている。北側範囲に検出された落し穴列の配列は久保御堂遺跡より検出された東列のものと谷を挟んで逆V字状成していることなどを考慮すると、久保御堂遺跡の落し穴列と師岡平遺跡の北側落し穴列は有機的な関係を有していたものと推定できる。落し穴の構造に着目すると、上の平遺跡の場合その規模や構造に相違が見られ、本遺跡の落し穴群と関連付けすることはできないが、師岡平遺跡の北列を構成している落し穴の場合、久保御堂遺跡の東列のものと規模構造共に類似しており、配列等のあり方も加

味すると一連のものと考えることができ、師岡平遺跡、久保御堂遺跡一帯が広域の狩り場であったことが窺える。

平安時代の遺構に着目すると、竪穴住居址が上の平遺跡に2軒確認されているが、その配列には一定性が認められず、立地にも共通点がなく散在型の集落と捉えられ、また、時期も本遺跡が平安時代前半に帰属するのに対して、上の平遺跡のものは平安時代後半のもので、直接久保御堂遺跡に関わるものとは考えられないが、平安時代を通じてこの地が生活の場として利用されたことが窺える。

師岡平遺跡に於いても遺構の検出はなされていないが、上の平遺跡と同様な時期の遺物が得られており、師岡平遺跡と上の平遺跡は平安時代において同時期に存在したものと考えることができよう。

このような遺跡の状況を推論し、平安時代の時期別の地域的な変遷を考えると、平安時代前半（久保御堂遺跡）→平安時代後半（上の平遺跡・師岡平遺跡）のような、小地域において移動が行われていたものとも考えることもできよう。

中世では遺構等の在り方等より師岡平遺跡が、規模の大きな集落であったことが判明している。遺物等のから見ると久保御堂遺跡は、師岡平遺跡と同時期に併存していたことが窺えるが、遺物量や遺構の密度等から考えると、久保御堂遺跡は師岡平遺跡に付随する何らかの地として考えることができようか。

平安時代において久保御堂遺跡・師岡平遺跡・威力不動尊東遺跡・上の平遺跡が大きな一つの遺跡群を構成していることは、前項で述べてきた。この遺跡群（地域名を冠し上古田・御作田遺跡群とする。）に対してこの近在にいくつかの遺跡群が点在している。上古田・御作田遺跡群の東側約1.5kmには槻木遺跡群が、北西約1.5kmには下古田・堀之日遺跡群が位置している。これらの遺跡群について詳細に述べる枚数はないが、遺跡群の内容は上古田・御作田遺跡群と存続時期等に大きな違いがなく、これらの遺跡群が相互に関連性を持って存在していたものと考えられる。

八ヶ岳山麓における平安時代における遺跡の相互間の関係について、鉄製品の保有と小鍛冶遺構・遺物の関連から集団のテリトリーが考察されているが、今回の調査においては小鍛冶に関わる資料が得られていないために、この方法にのっとり遺跡間の相互関係について窺うことはできないが、近世における新田開発の状況等を加味した地域的な特性から窺うと、上古田・御作田遺跡群と槻木遺跡群は密接な関係を有していたものと考えられ、柳川英司氏も地理的な環境や遺跡の存続関係等から、槻木遺跡群に位置する禰田頭A遺跡・禰田頭C遺跡の母村を「古田村」と類推している。

2. 遺跡の研究史

今回の発掘調査以前の考古学的調査 豊平地区は縄文時代の遺跡が密集している八ヶ岳西南麓の中において、実石遺跡を中心とする地域を遺跡分布の濃い地域と考えられていた。八ヶ岳西南麓の遺跡を精力的に調査してきた宮坂英次氏も豊平地区（古川）において数箇所の遺跡を踏査しているが、本遺跡については未調査のままで、周知されていた遺跡ではなかった。昭和54年度に実施された八ヶ岳西南麓広域遺跡保存対策調査研究の際や、茅野市史における調査では未確認の遺跡であったが、平成7年度に偶然に地元民より遺物採集の報がもたらされ、該当地区周辺の遺跡分布調査を実施した結果、本遺跡の存在を把握した。本遺跡の性格上遺物の散布は少なかつたこと等が、本遺跡の存在を不明にしていたものと思われる。このように未知の遺跡であったために分布調査を実施するまでは、遺跡の存続時期やその範囲を明確ではなかった。

3. 遺跡周辺の歴史的事象と史跡

歴史的事象等よりの古田地区 本遺跡の所在する古田地区は古くよりその名称が文献に表れている。八ヶ岳西南麓における郷村の文献記録はそれほど多いとは言えない。本遺跡の立地する古田地区における文

献資料の初見は、嘉禎3年(1237)6月『祝詞段』に古田の記載が見られる。天正6年(1576)2月「上諏訪造宮帳」には古田郷と記されている。また、地名ではないが古田神主と記される諏訪社に属する小祝の名を建武2年(1335)2月「大祝職位事書」に見ることができる。このように古くから古田地区は開けた地域であり、数多くの歴史的な事象を残す地域であることが理解できる。

古田地区の史跡の概要 多くの史跡が点在する。この中で、本遺跡周辺に点在する史跡の概要について述べてみたい。

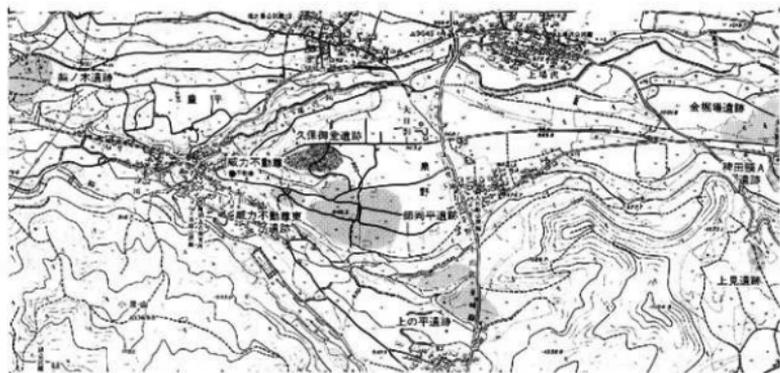
威力不動堂 文化13年(1816)に甲斐駒ヶ岳の開山を行った延命行者(小尾権三郎)が開いた行屋が本遺跡の南東側に谷を挟んで位置する。同行屋は諏訪八十八ヶ所の七十九番札所となっており、駒ヶ岳講などと共に信仰の場となっている。威力不動堂の北東側台地斜面には延命行者の入定塚と言われる延命行者墓が位置する。

古田七堂 古田村内に散らばったいくつかの堂宇を示している。阿弥陀堂・地藏堂(蟻舘堂)・神加堂・太子堂・久保見堂等がこれらに当たり、現在では創建当時の位置より移動しているものの阿弥陀堂・地藏堂(蟻舘堂)が現存するだけで、他のものは小字に名残が見られるだけである。古田七堂の一つである久保見堂は小字等から考えると本遺跡周辺を指すものと考えられる。

原山道 原山道なる名称を有する古道が、ちょうど遺跡を南北方向に切る形で走っている。起点は不明であるが、本遺跡から北側の豊平南大塚に位置する山守白山社に向かって走っており、八ヶ岳山麓部を南北方向に繋ぐ重要な経路であったものと考えられる。

久保御堂遺跡周辺の墓制 史跡ではないが久保御堂遺跡周辺に特徴的な墓制を見ることができる。埋葬と陪墓の両墓制の墓制を見ることができ、埋葬の中には自家の畑の約1坪程度の区画内に埋葬を行い、墓碑等は建てず河原礫を載せただけの簡略なものが見られ、埋葬の位置を自家の畑地隅を選定する点に興味深いものがある。なお、これらの墓は近世から近代にかけてのものようである。

以上列記してきた史跡等については、古田地区においては微々たるものであるが、これらの史跡等の歴史的な事象を見ると、中世からのものと、近世のものが認められ、所謂山浦地域に於いて重要な位置を占めていたものと考えられる。また、若干墓制について記したが、これらから想像すると割合古様相を残している部分が遺存しているものと思われる。



第4図 周辺の遺跡とその地理的位置 (1/20,000)

第三章 遺跡の層序

第1節 調査区の基本的層序

1. 土層の基本的な堆積状況

本遺跡の立地している台地は、八ヶ岳起源の火山堆積物である泥・砂・礫・上層部を新期ローム層等を基盤としており、この上部に有機物腐食物の堆積物である黒色土が堆積し台地全体を形成している。北八ヶ岳西麓の地形区分に従うと、本遺跡の立地している台地は第 1 段丘面（南大塩面）である。第 1 段丘面は中期ロームが、風成や水成により堆積したものを基盤とし、この上部に菅沢火砕流・大塩火砕流が降り、その上層に新期ロームが覆っている。

台地の西側や南側の段丘崖などにはこれらの堆積状況が窺える部分が見られる。斜面部や入り組み谷部では上部に堆積していたローム層が流出しており、ローム層下部に堆積する軽石等の礫を含むハードローム層が露出している部分が見られた。

調査区全体は耕作による攪乱がいたる部分に亘っており、プライマリーな土層の堆積状況を調べられる地点はごく限られた部分だけで、下記に説明を加えてある地点は調査区の西側壁のものである。発掘調査において中世と平安時代、縄文時代の遺構が検出されているが、生活面の分層には至っていない。しかし遺構の覆土の色調は時代によりある程度の識別が可能であった。

- | | | |
|---------|------|---|
| I a 層 | 耕作土 | 軟質で内部に根が入り込み、全体的に締まりがない。現在耕作されている畑の耕土。 |
| I b 層 | 黒色土 | I 層に比較すると締まりが割合あり、硬質な傾向を呈する。内部には畑の肥料として用いられた石灰の顆粒が混入する。 |
| II a 層 | 黒褐色土 | 色調は黒色土に類似するが、内部に含有されているローム細粒子より黒色土と分離した。含有されているローム細粒子は 1 mm 以下の微細なもので、その量も多くはない。層全体は若干の締まりを持つだけである。 |
| III a 層 | 茶褐色土 | 堆積していた土層の中で最も締まりを持ち粘性を持っている。内部には 1 mm から 2 mm 大のローム粒子を若干含有する。 |

2. 土層の成因と性格について

遺跡に堆積する土層を大きくその性格より I 層から III 層の 3 群に分類した。

これらを土層の状況より概観して見ると I 層群は現在の耕作に関わる土層群で、I a 層・I b 層がその状況より耕土と思われ、I 層が土層内で最も厚く堆積している。土層内は大型農耕機械による攪乱を受けている状況が観察され、かなり深い部分のローム層上面にまで攪乱が及んでいた部分も認められた。

基本的には上記した層序を基本層序とするが、地形の相違により若干の変化を持つ。特に台地の南西方向に入り込む小規模な谷状地形においては黒色土（I a 層・I b 層）と黒褐色土（II a 層）の間に漆黒土層が厚く堆積していた。また、層厚も地形に左右されており、台地の頂部においては黒褐色土（II a 層）、茶褐色土（III a 層）が流出しており、耕作上下はすぐにハードロームといった状態であった。また、台地の南・西側縁辺は傾斜が著しいこともあり、I 層・II 層・III 層、ソフトローム層が流失し、スコリアを含むハードロームの基盤が露出している状況の部分が観察できた。

第IV章 検出された遺構と遺物

第1節 平安時代の遺構と遺物

1. 竪穴住居址

今回調査された竪穴住居址は、平安時代の竪穴住居址で、番号は第5号まで付されている。これらの竪穴住居址は全て重複関係を持たず、散在する形で検出された。時期より見ると全て平安時代後半に帰属するもので、平安時代後半の短期集落として捉えることができる。検出された竪穴住居址の内約1/2は、耕作等の擾乱のために掘り方等が削平されており、奥壁部の一部や壁際に廻る周溝、カマド火床部の焼土しか遺存していないもので、竪穴住居址の余容を完全に把握できたものは、第1号住居址、第2号住居址の2軒に過ぎない。

第1号住居址（第5・6図・図版2）

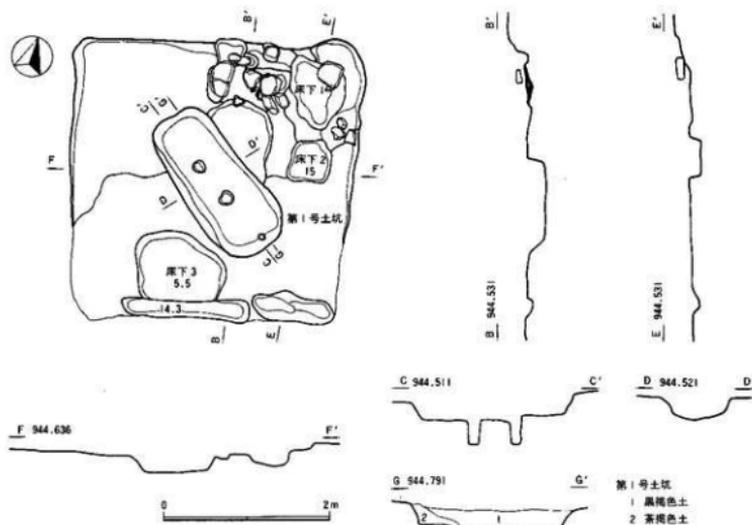
検出状況 本址は調査区の最も南東側Z-5、A-5グリッドにおいてカマドと思われる石組みが検出されその存在が明確となったものである。住居址は台地の南側縁辺に近い部分に入り込む浅い入り組み谷に面するように占地し、隣接する住居址はない。竪穴住居址の平面プランをほぼ確認することはできたが、南側に傾斜する地形の関係より南側の壁を検出することはできなかったが、検出した北・東・西側のプランや壁際に廻る周溝よりほぼ住居址の平面形プランを把握することができた。本址内中央部には第1号土坑が重複している。

遺構の構造 検出された北・東・西側壁、南側壁際の周溝より平面形プランを見ると、やや北東・北西側コーナー部分が張り出す形の方角を呈し、コーナー部分がやや張出すことより若干全体的には歪んだ平面プランとなる。東-西方向と北-南方向の辺の長さには若干の相違が見られ、東-西辺が長軸となり、全体的に横長の方形プランとなる。規模は長軸3.4m×短軸3.48mで規模的には一般的な規模を呈する。北壁側にカマドを構築しており、このカマドを通る線を主軸方向とすると、主軸方向はN-16°-Wを示す。

壁の立上りは南西・南東・南側は地形の関係より流出して検出はされていないが、北側が最も明瞭である。西・東側は地形が南側に傾斜を持つため南側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な北側で5.7cm、西側で1.8cm、東側で5.5cmを測る。壁の掘り方は不明瞭で凹凸を呈する。壁の立上りは直線状に立ち上がる形を基本としていたようであるが、実際には割合緩やかで、床際が丸みを持ち立ち上がる傾向が見られる。

北・西・東側壁際には、周溝や壁際に廻る小孔は検出されていないが、南側壁際には幅23cm前後の割合幅広い周溝が途切れて構築されている。この周溝は幅の割には深さを持たず、最も深い部分で7cmを測る。周溝の掘り方は余り丹念ではなく、断面形が不整形なU字形を呈する。

直接ローム床面としているが、全体的に床面は軟弱な傾向を示し、特に南側は地形の関係より床面が流出しており検出することができなかった。住居址の北側約半分の範囲は土間状にやや硬化し、特にカマド周辺が最も硬質で、その範囲は1.2m×0.8mの不整形な方形を呈している。この範囲の床は小さな凹凸を呈し、ほぼ水平に構築されている。床面の硬化の状況等よりカマド前庭部がたたき状の土間であったものと考えることができよう。住居址中央の範囲に第1号土坑が重複するが、土坑の北側上面に貼り床が認められ、新旧関係を把握することができた。床下土坑が東側コーナー部に寄った位置（床下土坑1）に、住居址中央部より北東に寄った位置（床下土坑2）と、南側周溝に重複する形（床下土坑3）で検出されている。床下土坑1

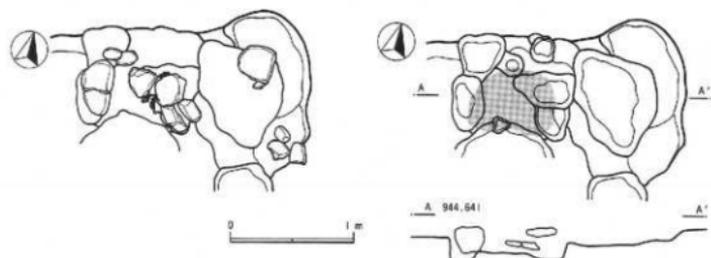


第5図 第1号住居址 (1/60)

は94cm×64cmの不整楕円形を呈しており、東側壁際に平坦な礫が遺存する。深さは8cmを測り、浅い皿状を呈する。土坑内にはカマドに用いられていた白灰色粘土ブロックやロームブロック・焼土ブロックを含む黒褐色土が堆積しており、その状況よりこの土坑が埋め戻されたものと考えることができよう。東側に検出されている平坦な礫が土坑上面に水平に置かれていたような状態で検出されており、土坑が埋め戻された後に土坑上に据えたものと考えることができよう。なお、土坑内より須恵器坏片や土師器變片が検出されている。床下土坑2の規模は48cm×49cmの不整隅丸方形を呈しているが、その掘り方は割合しっかりしており、深さは15を測る。土坑上面には明瞭な貼り床は認められてはいない。土坑内の覆土は住居址の覆土とは異なり、カマドに用いられていた白灰色粘土ブロックやロームブロックを含む黒褐色土が堆積しており、その状況よりこの土坑が埋め戻されたものと考えることができよう。床下土坑3は床下土坑2よりも規模的にも大きく、1.17m×0.98mの不整円形を呈する。深さは5.5cmを測りその状況は浅い皿状となる。土坑覆土は床下土坑2とは異なり住居址覆土と同様の黒褐色土が堆積しており、埋め戻されたような痕跡等を確認することはできなかった。

主柱穴と思われるような柱穴の検出はなされてはいない。

カマドが住居址の北壁中央部より約50cm東側によった位置に1ヶ所検出された。カマドの範囲は東西1.02m×南北0.78mの範囲に構築されている。カマド構造は石組み粘土貼りカマドであるが、遺存していたものは西側の袖石だけであり、袖石や天井石に関わるとと思われる割合平坦な礫がカマド掘り方の東側にやや浮いた状態で積み重なり検出されている。石組み上面に貼られていたような状態で粘土は遺存してはいなかったが、カマド周辺に崩れたような状態で白灰粘土が若干残存していた。このような状態から、本カマドは人為的に壊されたものと考えることができよう。カマドの掘り方は袖石を据える薄溝の掘り方と、火床の浅い皿状の



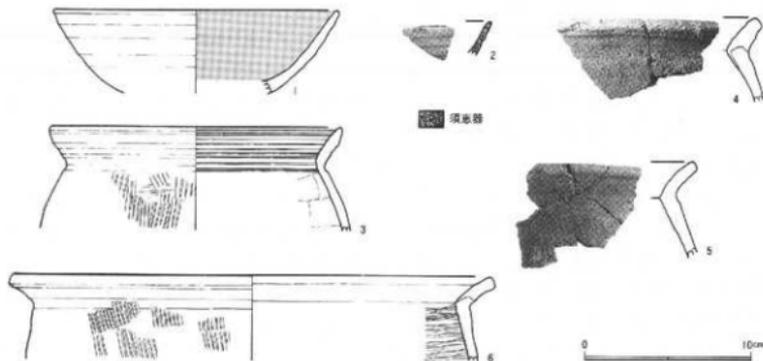
第6図 第1号住居址カマド (1/40)

掘り方は検出されたが、煙道に関わる掘り方等は確認されていない。なお、火床範囲には硬く締まった焼土が検出され、その厚さは8cmを測る。カマド掘り方東側範囲の礎下から土師器長胴甕片がつぶれたような状態で検出されている。

覆土は黒褐色上の単一層である。土層の状況は締まりが良く1mm～3mm大のローム粒子を含有し、特に北側範囲に集中する傾向が観察できる。

遺物の出土状況 出土遺物は住居址のカマドと床下土坑1を中心とした範囲より検出されているが、完形で検出されたものではなく、全て破片でありカマド内からのものはカマド構築用の礫と一緒に検出されている。出土した土器の内訳は、土師器黒色土器坏片4、小型甕片27、長胴甕片221、須恵器坏片1が検出され、その総重量は1,641gを測る。その量は今回調査された久保御堂遺跡の住居址の内でも最も多い。

出土遺物 (第7図1～6) 本址から検出された遺物は土器類を中心としている。器種では土師器黒色土器坏・小型甕・長胴甕・須恵器坏が認められ、数量的には土師器長胴甕が主体を占める。個別資料の判別の可能なもので数量を考えると、土師器黒色土器坏2個体以上、小型甕1個体以上、長胴甕5個体以上、須恵器坏1個体分の資料が検出されている。この中の土師器黒色土器坏1、小型甕1、長胴甕3、須恵器坏1を図示した。



第7図 第1号住居址出土遺物 (1/3)

土師器黒色土器環は体部が、丸みを持ち立ち上がる大振の法量を持つもので、内面は黒色処理がなされ、丹念な研磨がなされている。小型甕はやや肥厚する口縁部が「く」の字状に大きく外反し、体部が丸みを持ち張りむ器形を呈する。器壁は薄く口縁部内面、外面頸部以下をカキメ整形を施す。長胴甕は口唇部の断面形がやや方形を呈し、口縁部が強く外反する。内外面にハケ整形を施しており、口縁部を除く部分に行うもの、全面にハケ整形を施すものが認められた。器壁が非常に薄く復元できず、器形等を窺うことはできないが、体部等にへら削り整形を施す所謂「武蔵型」甕も認められる。

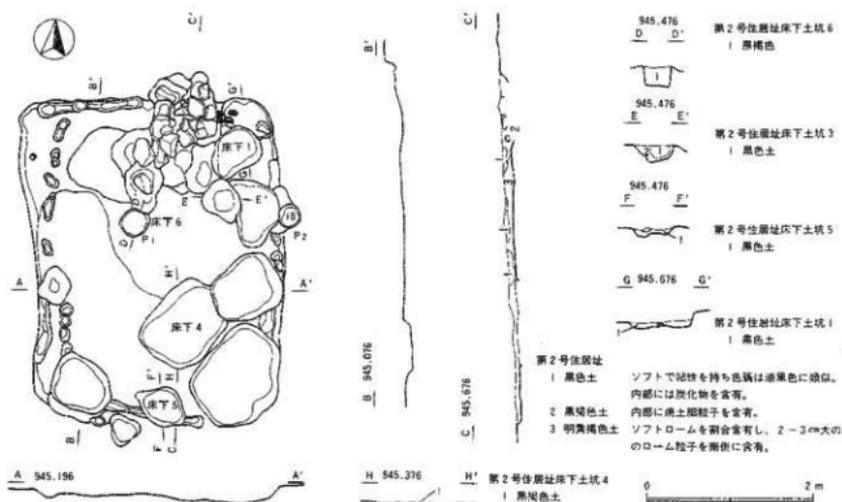
須恵器環は小片のために器形等の詳細を述べることは難しいが、得られた破片より推定すると、体部にやや丸みを有する器形を想定できよう。本資料の特徴は灰白色軟質な焼成にあり、軟質の須恵器と捉えられる。

本址は検出された遺物等より9世紀末から10世紀前半に帰属するものと考えられる。

第2住居址 (第8・9図・図版2)

検出状況 本址は調査区の最も東側に位置し、試掘トレンチT-33の中ほどでその平面の一部が検出されその存在が明確となったものである。住居址は台地の南側斜面部のほぼ中央部に占地し、隣接する住居址や重複する遺構はない。竪穴住居址の平面プランをほぼ確認することはできたが、南側に傾斜する地形の関係より南側の壁を検出することはできなかったが、検出し得た北・東・西側のプランや壁際に遡る崖溝よりほぼ住居址の平面形プランを把握することができ、今回調査された竪穴住居址の内で最も整った形である。

遺構の構造 検出された北・東・西側壁、南側壁際の周溝より平面形プランを見ると、やや北西・南西側コーナー部分がやや張り出す形を呈し、コーナー部分がやや張り出すこと、南辺がやや張り出すことより若干全体的には歪んだ平面プランとなる。東-西方向と北-南方向の辺の長さには相違が見られ、北-南辺が長軸となり、全体的に縦長の方形プランとなる。規模は長軸3.93m×短軸3.02mで規模的には一般的な規模よりやや大型の規模を呈する。北壁側にカマドを構築しており、このカマドを通る線を主軸方向とすると、主軸



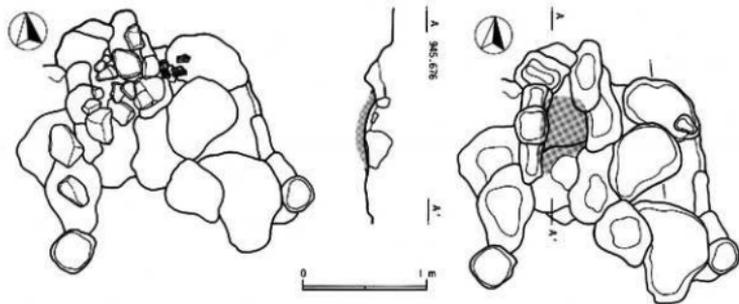
第8図 第2号住居址 (1/60)

方向はN-5°-Wを示す。

壁の立上りは南東・南側は地形の関係より流出して検出はされていないが、北側が最も明瞭である。西・東側は地形が南側に傾斜を持つため南側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な北側で14cm、西側で9cm、東側で14cmを測る。壁の掘り方は不明瞭で凹凸を呈する。壁の立上りは直線状に立ち上がる形を基本としたようであるが、実際には割合緩やかで、床際が丸みを持ち立ち上がる傾向が見られ、特に東・西壁側についてこの傾向が強い。

北・西・南・東側壁際には、周溝や小孔が途切れながらも検出されている。この周溝は幅の割には深さを持たず、最も深い北側部分で5cmを測る。周溝の掘り方は余り丹念ではなく、断面形が不整形なU字形を呈する。また、周溝と繋がるように小孔も検出されている。小孔の設けられている位置は周溝と同様な位置に設けるもの(北・東壁際)が一般的であるが、西壁側のものは壁際から8cm前後内側に構築されている。このような現象は本址が西側に拡張された結果生じたものであろうか。

直接ルーム面床としているが、全体的に床面は軟弱な傾向を示しているが、他の住居址に比較すると、硬質な傾向を示す。南側は地形の関係より床面が流出しており検出することができなかった。住居址の中央部の範囲は土間状にやや硬化し、特にカマド前庭部が最も硬質である。この土間状の範囲は1.2m×1mの不整形な方形を呈している。この範囲の床は小さな凹凸を呈し、ほぼ水平に構築されている。床面の硬化の状況等よりカマド前庭部がたたき状の土間であったものと考えることができよう。床下土坑は5ヶ所検出されている。東側コーナー部に寄った位置(床下土坑1)に、カマド前庭部の東側(床下土坑3)に、住居址中央部より南に寄った位置(床下土坑4)と、南側周溝に重複する形(床下土坑5)が検出されている。床下土坑1は67cm×53cmの不整形円形を呈している。深さは16cmを測り、浅い皿状を呈する。土坑内にはカマドに用いられていた白灰色粘土ブロックやロームブロック・焼土ブロックを含む黒褐色土が堆積しており、その状況よりこの土坑が埋め戻されたものと考えることができよう。なお、土坑内より須恵器坏片や土師器焼片が検出されている。床下土坑3の規模は56cm×46cmの不整形円形を呈しているが、その掘り方は割合しっかりしており、深さは19cmを測り柱穴状である。土坑上面には明瞭な貼り床は認められていない。土坑内の覆土は住居址の覆土とは異なり、カマドに用いられていた白灰色粘土ブロックやロームブロックを含む黒褐色土が堆積しており、その状況よりこの土坑が埋め戻されたものと考えることができよう。床下土坑4は床下土坑内でも規模の大きなもので、1.09m×0.84mの不整形円形を呈する。深さは9cmを測りその状況は浅い皿状となる。土坑覆土は床下土坑3とは異なり住居址覆土と同様の黒褐色土が堆積しており、埋め戻され



第9図 第2号住居址カマド (1/40)

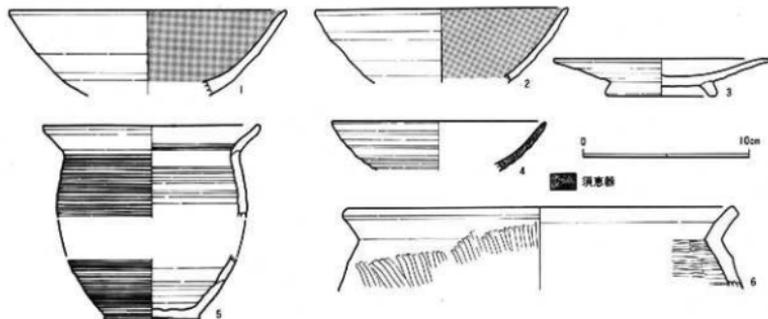
たような痕跡等を確認することはできなかった。床下土坑5は両側周溝と重複する形で検出されている。67cm×48cmの不整形円形を呈し、深さは7cmを測る。番号を付してはいないがこの他に床下土坑が4ヶ所検出されている。床下土坑の構築されている位置は住居址内でも一定の位置に認められ、カマド周辺のもの、住居址南東側周辺のものに分けることができよう。土坑内の覆土等よりカマド周辺の床下土坑はカマド内の灰等処理するものと考えられ、他のものとは分離することができよう。

主柱穴と思われる柱穴が2ヶ所検出されている。P₁は住居址中央部よりやや北西側に寄った位置に構築されている。直径が32cmの円形を呈し、深さ24cmを測る。P₂は東壁に重なる状態で、東壁中央部より北側に約50cm寄った位置に検出された。直径が29cmの円形を呈し、深さ18cmを測る。P₁とP₂の間隔は1.85mを測り、構築されている位置は直線状になることなどより、P₁とP₂は組みをなすものと考えられる。この柱穴に囲まれた範囲にはカマドが見られ、柱穴は住居址内の場の区切りに関わっていたものと考えることができよう。なお、柱穴に囲まれた範囲と土間状の範囲は一致しており、住居址内の場割を考える上に重要な所見となろう。

カマドが住居址の北壁中央部より約50cm東側によった位置に1ヶ所検出された。カマドの範囲は東西0.81m×南北1.11mの範囲に構築されている。カマド構造は石組み粘土貼りカマドであるが、カマドに関わる礫は原位置で遺存しているものはない。袖石や天井石に関わると思われる割合平坦な礫がカマド掘り方の東側にやや浮いた状態で積み重なり検出されている。石組み上面に貼られていたような状態で粘土は遺存してはなかったが、カマド周辺に崩れたような状態で白灰粘土が若干残存していた。このような状態から、本カマドは人為的に壊されたものと考えることができよう。カマドの掘り方は袖石を据える溝状の掘り方と、火床の浅い皿状の掘り方、煙道に関わる小さな張出しが検出された。なお、火床範囲には硬く締まった焼土が検出され、その厚さは7cmを測る。カマド掘り方東側範囲の礫層から土師器長胴甕片がみつれたような状態で検出されている。

覆土は3層に分離でき、上層に黒色色土(第I層)、下層に黒褐色土(第II層)が、カマド周辺には明黄褐色土(第III層)が堆積する。基本的には自然堆積の状況を呈している。

遺物の出土状況 出土遺物は住居址のカマドと床下土坑1を中心とした範囲より検出されているが、完形で検出されたものはなく、全て破片でありカマド内からのものはカマド構築用の礫と一緒に検出されている。出土した土器の内訳は、土師器坏片2、黒色土器坏片19、皿片9、小型甕片15、長胴甕片105、須恵器坏片



第10図 第2号住居址出土遺物 (1/3)

3が検出され、その総重量は1,145gを測る。今回調査された久保御堂遺跡の住居址の内で最も器種多い。

出土遺物 (第10図1-6) 本址から検出された遺物は土器類を中心としている。器種では土師器環・黒色土器環・皿・小型甕・長胴甕・須恵器環が認められ、数量的には土師器長胴甕が主体を占める。個別別資料の判別の可能なもので数量を考えると、土師器環2個体、黒色土器環6個体以上、皿1個体、小型甕1個体以上、長胴甕3個体以上(内1点は武蔵型甕)、須恵器環1個体分の資料が検出されている。この中の土師器黒色土器環2、皿1、小型甕1、長胴甕1、須恵器環1を図示した。

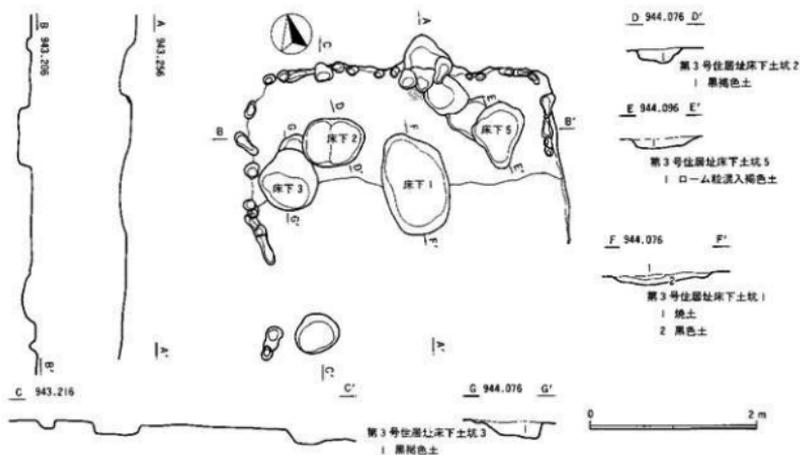
土師器黒色土器環は体部が、丸みを持ち立ち上がる大振の法量を持つもので、内面は黒色処理がなされ、丹念な研磨がなされている。皿は断面形が方形を呈する高台を持ち、底部処理は回転系切り後強いナア整形で糸切痕をナア消している。体部は大きく外反し、内面は放射状のヘラミガキがなされる。小型甕はやや内彎する口縁部が「く」の字状に大きく外反し、体部が丸みを持ち瓶らむ器形を呈する。器壁は薄く口縁部内面、外面頸部以下をカキメ整形を施す。底部は回転系切痕を残す。長胴甕は口唇部の断面形がやや方形を呈し、口縁部が強く外反する。内外面の口縁部を除く部分にハケ整形を施すものが認められる。図示はされてはいないが、器壁が非常に薄く復元できず、器形等を窺うことはできないが、体部等にヘラ削り整形を施す所謂「武蔵型」甕も認められる。

須恵器環は体部にやや丸みを有する器形で、その焼成が灰白色軟質であることより、軟質の須恵器と捉えられる。

本址は検出された遺物等より9世紀末から10世紀前半に帰属するものと考えられる。

第3号住居址 (第11図・図版3)

検出状況 本址は調査区のはほぼ中央部に位置し、試掘トレンチT-31の南側でその平面の一部が検出されその存在が明確となったものである。住居址は台地の南側斜面部のはほぼ中央部よりやや南側に寄った位置に占地し、隣接する住居址や重複する遺構はない。南側に傾斜する地形の関係より南側の壁を検出することができず、竪穴住居址の平面プランの全容を確認することはできなかった。検出し得た北・東・西側のプラン



第11図 第3号住居址 (1/60)

や壁際に廻る周溝より、住居址の平面形プランを想定すると、不整形な方形プラン呈するものと考えることができよう。

遺構の構造 検出された北側壁・東側壁・西側壁際の小孔より平面形プランを見ると、やや東側壁の中央部がやや張り出す形を呈し、全体的には歪んだ平面プランとなる。南壁が流出しており、また、周溝等も検出されなかったために住居址の正確な規模を把握することはできなかったが、南西隅に検出されている床下土坑を住居址内の施設と考え、規模は北-南軸3.5m×西-東3.85mで規模的には一般的な規模で、やや西-東辺が長く横長の平面プランを呈するものであろうか。北壁側にカマドを構築しており、このカマドを通る線を主軸方向とすると、主軸方向はN-11°-Eを示す。

壁の立上りは西・南東・南側は地形の関係より流出して検出はされていないが、北側が最も明瞭である。西・東側は地形が南側に傾斜を持つため南側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な北側で9cmを測る。壁の掘り方は不明瞭で凹凸を呈する。壁の立上りは直線状に立ち上がる形を基本としていたようであるが、実際には割合緩やかで、床際が丸みを持ち立ち上がる傾向が見られる。

北・西・東側壁際には、壁際を廻る小孔が検出されているが、周溝と思われる施設は検出されていない。壁際に廻るように設けられている小孔は径12cm前後の割合不整形なもので、その深さも10cm前後と割合浅めのもので主体を占める。小孔は基本的には単独で掘られているが、北壁側の一部等に小孔が連なり扇溝状となる部分もある。

直接ローム面床としているが、全体的に床面は軟弱な傾向を示し、特に南側は地形の関係より床面が流出しており、約1/2程を検出することができなかった。住居址の北側約半分の範囲は土間状にやや硬化し、特にカマド周辺が最も硬質であったが、第1号・第2号住居址のように明確な土間範囲を検出することはできなかった。床は小さな凹凸を呈し、ほぼ水平に構築されている。床面の硬化の状況等よりカマド前庭部分がたたき状の土間であったものと考えることができよう。床下土坑が住居址中央部よりやや北に寄った位置(床下土坑1)と、床下土坑1の西側に寄った位置(床下土坑2・3)、東側コーナー部に寄った位置(床下土坑5)に検出されている。床下土坑1は1.27m×0.78mの不整楕円形を呈しており、深さは10cmを測り、浅い皿状を呈する。土坑内には焼土を含む黒褐色土が堆積しており、その状況よりこの土坑が埋め戻されたものと考えることができよう。床下土坑2の規模は76cm×58cmの不整円形を呈しているが、その掘り方は割合しっかりしており、深さは16cmを測る。土坑上面には明瞭な貼り床は認められてはいない。土坑内の覆土は住居址の覆土と同様の傾向を示す。床下土坑3は床下土坑2と重複関係を有している。規模的にも床下土坑2と同様な規模を呈し、74cm×70cmの不整円形を呈する。深さは19cmを測る。土坑覆土は床下土坑2と同様に住居址覆土と同様の黒褐色土が堆積しており、埋め戻されたような痕跡等を確認することはできなかった。床下土坑5は80cm×65cmの不整楕円形を呈しており、深さは11cmを測り、浅い皿状を呈する。土坑内には焼土を含む黒褐色土が堆積しており、その状況よりこの土坑が埋め戻されたものと考えることができよう。

主柱穴と思われるような柱穴の検出はなされていない。

カマドが住居址の北壁中央部より約30cm東側によった位置に1ヶ所検出された。カマドの範囲は東西75cm×南北71cmの範囲に構築されている。カマド構造は石組み粘土貼りカマドであると思われるが、カマド構築に関わる礫や、白灰粘土等の検出はなされず、このような状態から、本カマドは人為的に全て壊され軸石や灰井石等のカマド構築に関わるものは全て除去されたものと考えることができよう。カマドの掘り方は軸石を支える溝状の掘り方と、火床の浅い皿状の掘り方が検出され、火床から延びるように煙道に関わる掘り方が北側にやや張り出す。なお、火床前庭には硬く締まった焼土が検出され、その厚さは3cmを測る。カマド側

り方等から遺物の検出はなされていない。

覆土は黒褐色土の単一層である。土層の状況は締まりが良く1mm～3mm大のローム粒子を含有し、特に北側範囲に集中する傾向が観察できる。

遺物の出土状況 出土遺物の量は少なく、完形で検出されたものはなく、全て破片である。

出土した土器の内訳は、土師器環片2、甲斐型環片1、小型甕片1、長胴甕片3が検出され、その総重量は2.5gを測る。



第12図 第3号住居址出土遺物(1/3)

出土遺物(第12図1・2) 本址から検出された遺物は土器類を中心としている。器種では土師器環・甲斐型環・小型甕・長胴甕が認められ、量的には土師器長胴甕が主体を占める。個別資料の判別の可能なもので数量を考えると、土師器環1個体以上、甲斐型環1個体、小型甕1個体以上、長胴甕2個体分の資料が検出されている。この中の土師器環1、甲斐型環1を図示した。

土師器環は体部が、丸みを持ち立ち上がる大振の法量を持つもので、内面は丹念な研磨処理がなされている。底部処理は回転糸切り痕を残す。甲斐型環はやや肥厚する口唇部が大きく外反する器形を呈する。体部が丸みを持ち展らむ器形を呈する。

図示はしていないが、小型甕は器壁は薄く、外面頸部以下をカキメ整形を施す。長胴甕は内外面にハケ整形を施しており、底部処理は木炭痕が認められる。体部等にヘラ削り整形を施す所謂「武蔵型」甕も認められる。

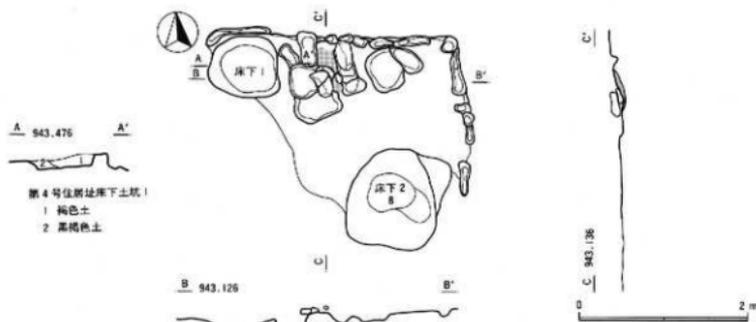
本址は検出された遺物等より9世紀末から10世紀前半に帰属するものと考えることができよう。

第4住居址(第13・14図・図版3)

検出状況 本址は調査区の南側に位置し、F-10グリッド周辺でその平面の一部が検出されその存在が明確となったものである。住居址は台地の南側斜面部のほぼ中央部、第3号住居址の南西側約11m離れた位置に占地して居る。竪穴住居址の平面プランで北壁側と東側壁の一部をほぼ確認することはできたが、南側に傾斜する地形の関係より南側の壁と、西側壁を検出することはできなかった。そのために住居址の全容を把握することができなかった。

遺構の構造 検出された北・東側壁の周溝より平面形プランを見ると、東辺がやや張り出すことより若干全体的には歪んだ方形の平面プランを想定できる。住居址の約1/2程度しか遺存していなかったために規模等については不明であるが、北西側に検出された床下土坑1を住居址北西隅に構築されたものとする、北辺は3mの規模を想定することが可能であろう。東辺の規模を窺い知るような要件は認められてはいないが、北辺の推定規模や他の住居址の規模等より、規模は3m×3mの一般的なものかと思われる。北壁側にカマドを構築しており、このカマドを通る線を主軸方向とすると、主軸方向はN-5°-Eを示す。

壁の立上りは南・西側は地形の関係より流出して検出はされていないが、北側が最も明瞭である。東側は地形が南側に傾斜を持つため南側に至るにつれ低くなり、最終的には流出し不明瞭となる。最も明瞭な北側で8cm、東側で4cmを測る。壁の掘り方は不明瞭で凹凸を呈する。壁の立上りは直線状に立ち上がる形を基本としていたようであるが、実際には割合緩やかで、床際が丸みを持ち立ち上がる傾向が見られ、特に東・北側についてこの傾向が強い。

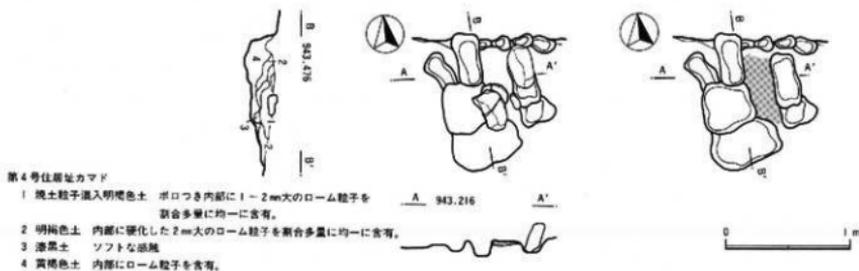


第13図 第4号住居址 (1/60)

北・東側壁際には、周溝や小孔が途切れながらも検出されている。この周溝は幅の割には深さを持たず、最も深い北側部分で4cmを測る。周溝の掘り方は余り丹念ではなく、断面形が不整形なU字形を呈する。また、周溝と繋がるように小孔も検出されている。

直接ルーム面を床としているが、全体的に床面は軟弱な傾向を示している。

南側は地形の関係より床面が流出しており検出することができず、全体の約1/2を検出したに過ぎない。土間状に硬化している部分等の確認はなされてはいない。床面は小さな凹凸を呈し、ほぼ水平に構築されている。床下土坑は3ヶ所検出されている。北西側コーナー部に寄った位置(床下土坑1)に、カマドの東寄り(床下土坑2)に、住居址中央部より南に寄った位置(床下土坑3)が検出されている。床下土坑1は83cm×75cmの不整楕円形を呈している。深さは14cmを測り、割合しっかりした掘り方を持つ。土坑内には焼土・粘土を含む黒褐色土が堆積し、その状況よりこの土坑が埋め戻されたものと考えることができよう。床下土坑2の規模は51cm×39cmの不整円形を呈しているが、その掘り方は割合しっかりしており、深さは10cmを測る。土坑上面には明瞭な貼り床は認められてはいないが、土坑内の覆土は住居址の覆土とは異なり、カマドに用いられていた白灰色粘土ブロックやルームブロックを若干含む黒褐色土が堆積しており、その状況よりこの土坑が埋め戻されたものと考えることができよう。床下土坑3は床下土坑内でも規模の大きなもので、1.17m×1.07mの不整円形を呈する。深さは9cmを測りその状況は浅い皿状となる。土坑覆土は住居址覆土と同様の黒褐色土が堆積しており、埋め戻されたような痕跡等を確認することはできなかった。床下土坑の



第14図 第4号住居址カマド (1/40)

構築されている位置は住居址内でも一定の位置に認められ、カマド周辺のもの、住居址南東側周辺のものに
分けることができよう。土坑内の覆土等よりカマド周辺の床下土坑はカマド内の灰等を処理するものと考え
られ、他のものとは分離することができよう。

主柱穴と思われる柱穴は検出されてはいない。

カマドは住居址の北壁中央部に寄った位置に1ヶ所検出された。カマドの範囲は東西75cm×南北75cmの範
囲に構築されている。カマド構造は石組み粘土貼りカマドであるが、カマドに関わる礫は東側袖石を除き原
位置で遺存しているものはない。袖石や天井石に関わるとと思われる割合平坦な礫がカマド掘り方の南側前庭
にやや浮いた状態で積み重なり検出されている。東側袖石は縦35cm×横25cm、厚さ11cmのほぼ方形を呈す
る礫をやや外側を向くように斜状に据えている。石組み上面に貼られていたような状態で粘土は遺存しては
いなかったが、カマド周辺に崩れたような状態で白灰粘土が若干残存していた。このような状態から、本カ
マドは人為的に壊されたものと考えることができよう。カマドの掘り方は袖石を据える溝状の掘り方と、火
床の浅い皿状の掘り方が検出されているが、煙道に関わる掘り方等は検出されてはいない。なお、火床範囲
には硬く締まった焼土が検出され、その厚さは4cmを測る。カマド掘り方内の壁下から土師器長胴甕片が
つぶれたような状態で検出されている。

覆土は黒褐色土の単一層である。土層の状況は締まりが良く1mm～3mm大のローム粒子を含有してい
る。

遺物の出土状況 出土遺物は住居址のカマドと覆土より検出されているが、完形で検出されたものはなく、
全て破片でありカマド内からのものはカマド構築用の礫と一緒に検出されている。出土した土器の内訳は、
土師器環片5、黒色土器環片1、小型甕片1、長胴甕片4が検出され、その総重量は257gを測る。



第15図 第4号住居址出土遺物 (1/3)

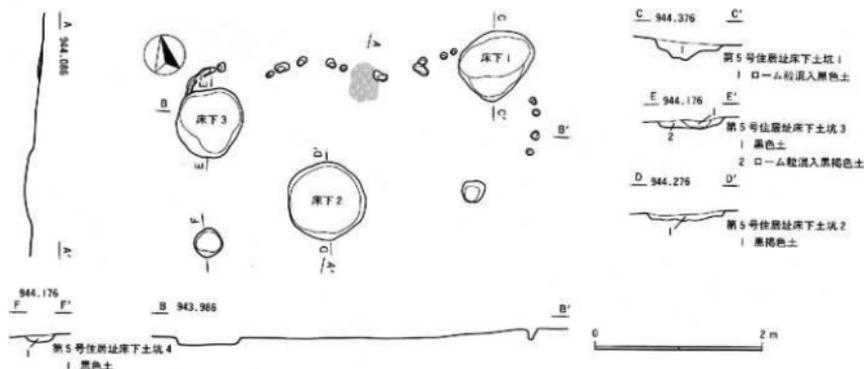
出土遺物 (第15図1～5) 本址から検出された遺物は土器類を中心としている。器種では土師器環・黒
色土器環・小型甕・長胴甕が認められ、数量的には土師器長胴甕が主体を占める。個別資料の判別の可能
なもので数量を考えると、土師器環5個体以上、黒色土器環1個体、小型甕1個体、長胴甕4個体以上 (内
1点は武蔵型甕) の資料が検出されている。この中の土師器環3、長胴甕2を図示した。

土師器環は体部が、丸みを持ち立ち上がる中振の法量を持つもので、丹念な研磨がなされている。長胴甕
は口唇部の断面形がやや方形を呈し、口縁部が強く外反する。口縁部の内面にハケ整形を施す。器壁が非常
に薄く、口縁部に強い横ナデがなされ、体部にへら削り整形を施す所謂「武蔵型」甕も認められる。図示は
してはいないが、小型甕は体部が丸みを持ち腹らむ器形を呈し、器壁は薄く外面にカキメ整形を施すものが
認められる。

本址は検出された遺物等より9世紀末から10世紀前半に帰属するものと考えることができよう。

第5住居址 (第16図・図版4)

検出状況 本址は調査区の西側に位置し、C・D-15グリッド周辺でカマド火床の焼土が検出されその存
在が明確となったものである。住居址は台地の南側斜面部のほぼ中央部よりやや北側に寄った位置に占地し、



第16図 第5号住居址 (1/60)

第4号住居址の北西側約23m離れた位置に構築されている。竪穴住居址の平面プランは、耕作や地形の等の関係から住居址掘り方等は検出できず、そのために住居址の全容を把握することができなかった。

遺構の構造 本址は遺構のほとんどが攪乱を受けており、壁の掘り方やカマドなどを検出することができず、検出された北・東側壁の小孔と床下土坑、カマド火床よりその存在が明確となったものである。平面形プランを把握することはできず、規模等については不明である。北壁側にカマドを構築しており、このカマドを通る線を主軸方向とすると、主軸方向は $N-8^{\circ}-E$ を示す。

壁の立上りは耕作により削平されており検出はされていない。

北・東側壁際には、小孔が途切れながらも検出されている。

住居址全面が削平を受けているために床面を検出することはできなかった。床下土坑は4ヶ所検出されている。北東側コーナー部に寄った位置(床下土坑1)に、住居址中央部(床下土坑2)に、北東コーナー部(床下土坑3)に、住居址南西壁際に寄った位置(床下土坑4)に検出されている。床下土坑1は90cm×74cmの不整楕円形を呈している。深さは20cmを測り、割合しっかりした掘り方を持つ。土坑内にはローム粒を含む黒褐色土が堆積している。床下土坑2の規模は93cm×95cmの不整円形を呈し、床下土坑内で規模の大きなものである。その掘り方は割合しっかりしており、深さは6cmを測る。床下土坑3は84cm×76cmの不整円形を呈する。深さは9cmを測りその断面は皿状となる。

土坑覆土は住居址覆土と同様の黒褐色土が堆積しており、埋め戻されたような痕跡等を確認することはできなかった。土坑上面には明瞭な貼り床は認められてはいないが、土坑内の覆土は住居址の覆土とは異なり、カマドに用いられていた白灰色粘土ブロックやロームブロックを若干含む黒褐色土が堆積しており、その状況よりこの土坑が埋め戻されたものと考えることができよう。

主柱穴と思われる柱穴は検出されていない。

カマドは住居址の北壁中央部に寄った位置に1ヶ所検出された。カマド火床の焼土しか遺存しておらず、カマドの構造等について把握することができなかった。カマド火床の焼土範囲は49cm×35cmで、厚さは4cmを測る。

遺物の出土状況 出土遺物は今回調査された住居址の中で最も少く、器形の窺い知れないような全て破片である。床下土坑1より土師器黒色土器坏片1、長胴甕片1が出土している。出土した土器の内訳は、土師



第17図 第5号住居址出土遺物 (1/3)

器黒色土器坏片2、長胴甕片1、須恵器甕片2が検出され、その総重量は132gを測る。

出土遺物 (第17図1～3) 本址から検出された遺物は土器類を中心としている。器種では土師器黒色土器坏・長胴甕・須恵器甕が認められる。個別別資料の判別の可能なもので数量を考えると、土師器黒色土器坏2個体、長胴甕1個体、須恵器甕1個体の資料が検出されている。この中の土師器黒色土器坏2、長胴甕1を図示した。

土師器黒色土器坏は体部が、丸みを持ち立ち上がるものと考えられ、口縁部がやや外反気味となる。内面は黒色処理され丹念な研磨がなされている。長胴甕は口唇部の断面形が方形を呈し、口縁部が強く外反する。口縁部の内面、体部内外にハケ整形を施す。

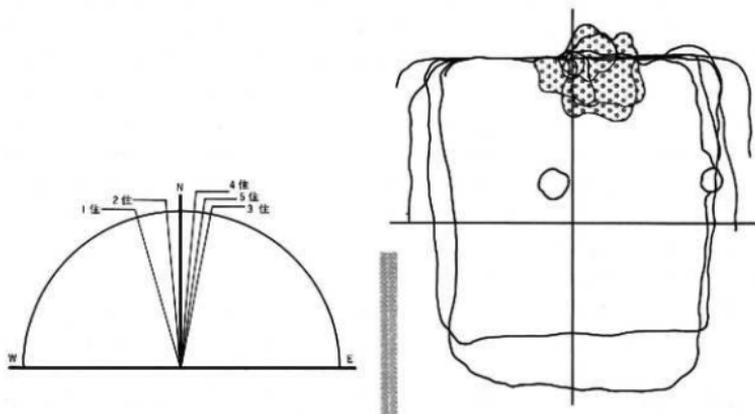
本址は検出された遺物等より9世紀末から10世紀前半に帰属するものと考えることができよう。

2. 平安時代の遺構の構成

今回の調査により検出された住居址は一定の配置が認められ、平安時代のムラの景観を窺い知ることのできる貴重な資料である。

竪穴住居址の構造について 今回調査された竪穴住居址でその平面形等の規模や、竪穴住居址内の施設が明確に把握できたものは第1号住居址と、第2号住居址の2軒に過ぎず、この2軒を持って本遺跡の平安時代の竪穴住居址について考えることはやや独善的ではあるが、敢えて概観してみる。

竪穴住居址の平面プランは第2号住居址を除いて全てが、東西軸が南北軸よりもやや長い横長の隅丸長方形を呈する。横長の平面プラン（カマドを構築している位置が長辺軸上となるもの）を基調とする平安時代の竪穴住居址が主体となる在り方は、市域において一般的に認められる現象で、本遺跡の例も例外ではない。第2号住居址にみられるような南北軸が長い縦長平面プラン（カマドを構築している位置が短辺軸上となる



第18図 平安時代住居址の主軸方向とカマドの位置

もの)となるものは類例が少ない。検出された竪穴住居址間の面積で大きな相違は認められず、飛び抜けて大型の住居址等は認められなかった。なお、竪穴住居址の規模は市域のハヶ岳西南麓から検出されている平安時代の竪穴住居址と大過ないものである。

カマドの構造は検出された住居址の全てが、石組粘土貼りカマドであった。完存しているカマドはなく、全て破壊された状態で検出された。カマドの破壊状況には三つの在り方、天井部・袖部の石全てを持ち去ってしまうもの(第3号住居址)、片側の袖石のみを残し天井部・袖部の石を火床土層に廃棄するもの(第1号・第4号住居址)、天井部・袖部の石を抜き去り火床上層に廃棄するもの(第2号住居址)が認められる。この行為は住居址廃棄時になされたものと考えられる。カマドの構築位置は北カマドで、ほぼ辺中央部に構築される。

床下土坑が全ての住居址より検出されている。床下土坑の構築されている位置を概観してみると、カマド周辺に位置するものと、カマドの対辺に位置するものが認められる。カマド周辺に位置するものの内部には、カマド内より掻き出されたものと思われる粘土粒子や焼土粒子を含むものが認められる。また、カマド周辺以外に位置する床下土坑内は、カマド周辺に位置する床下土坑とやや異なった土層の堆積状況を示していた。なお、両者の床下土坑共に土坑上面に貼り床等は認められなかった。土層状態等からカマド周辺の床下土坑は灰掻き穴と考えられる。他のものについては、その役割について積極的に示す根拠はない。

主柱穴は基本的には具備してはいないが、第2号住居址に主柱穴と思われるピットを検出した。この主柱穴は住居址内を四分割する位置に作られており、ちょうどカマド周辺を囲うような配列となる。平安時代の住居址で主柱穴を有するものは少ないが、今回の例と同様な例は立石遺跡⁽¹¹⁾第11号住居址、棚畑遺跡⁽¹²⁾第1号住居址に認めることができる。

遺物の出土状況について 今回の調査において住居址内より検出された遺物の量は少ない。検出された遺物は、カマドを中心とする範囲に散在する形で検出され、カマドを破壊しその際にカマド構築と一緒に関与されたような状態のものも認められた。

竪穴住居址の重複関係について 今回の調査により検出された竪穴住居址は、大まかに概観すると平安時代のある程度まとまった時間枠内に収まるものである。竪穴住居址間で重複関係を有しているものや、近接した位置関係を有するものはない。竪穴住居址間の重複関係が認められない点や近接関係を有していない点などを考慮すると、同一時間枠内で竪穴住居址が存在したものと考えることができ得る。

住居址の位置関係とその配列について 今回の調査された竪穴住居址は重複関係を有していないことを前記したが、これらの住居址の台地内の位置関係を概観してみる。試掘部に検出された平安時代の住居址を含めると、大きく四つのグループより構成されているように思われる。

Aグループ(第1号住居址)は南西-北東方向に入り組む谷を挟んだ南東側に展開する。Bグループ(第2号・3号・4号住居址)は入り組み谷の北西側に展開し、Aグループと対峙する位置にある。Bグループの住居址の配列はある程度の規則性が認められ、住居址間の距離は約150mを測り、その状況は一定の範囲内で同時に構築されたものと想定し得る状況を示している。Cグループ(第5号住居址)はBグループより北西側に約200m離れた位置に認められるものである。同グループの西側が未調査のために詳細を述べることはできないが、第5号住居址の軸線の在り方から推定すると、Bグループと平行するように展開するものと想定できようか。この他に試掘の際に台地西側尖端部に近い範囲に2軒の竪穴住居址が検出されている。詳細は不明ではあるが、とりあえずDグループとしておく。Dグループは他のグループとは軸線等にやや相違がみられることなどより考えて、Dグループは他のグループとは一線を画するものである可能性が高い。

この差異はDグループ周辺で採集された遺物より考えると、時間的な差を表しているように思われる。

住居址の台地内における展開のしかたを概観してきたが、久保御堂遺跡の平安時代の集落の規模は決して大きいとは云えず、むしろ小規模な散在型の集落と捉えられそうである。また、住居址が重複せず、一定の規範を窺わせるような間隔で配されている点などを加味すると、本集落は短期間の断続的なものと考えることができ、住居址の配列の一定性よりA・B・Cグループに帰属する住居址は同時に存在したのと考えることができそうである。遺物等より見ても同様な傾向が認められる。

Aグループ・Bグループの住居址の配列が、南西-北東方向に入り込み入り組み谷を挟んで展開していることを考えると、平安時代の人々はこの入り組み谷をかなり意識していたものと考えられ、この谷が台地下の谷に降りて行く個所であった可能性が高い。

今回の調査において、住居址以外の例えば生産の場等の検出はできなかったが、想像を豊かにするならば住居址の展開していない台地頂部周辺に畑地等を、南側の沢状の谷に水田を配していたものと考えられよう。



第19図 平安時代住居址の分布状況

第2節 縄文時代の遺構

1. 土坑

土坑は地表面に掘り込まれた「穴」を指し、所謂土壌や小堅穴、木の根による擾乱孔等を全て総称しており人為・自然を問わず遺構確認の段階において確認面下に掘り込みが確認できた「穴」全てについて番号を付し土坑として取扱った。本来ならば「穴」の用途に応じてその名称も落し穴や墓塚、貯蔵穴等に区分して所見・報告しなければならぬと考えられるが、今回得られたデータからはこれらを明確に区分するだけの情報を得ることはできなかった。

土坑内には「落し穴」とされる特徴的なものが含まれており、これらについては本来ならば土坑内から分離して取り扱わなければならないと思われるが、今回は遺構確認を行い遺構番号を附する段階で土坑の大別を行わず、全ての「穴」について連番を附したために土坑番号の煩雑さを避けるために、土坑内を性格において敢えて分離せず一括して捉えることとした。また、検出された「穴」の中には特異な深い土坑が検出され、この土坑について「落し穴」に含めるべきか、決定的な確認がないこともあるが、他遺跡の類例等より「落し穴」の範疇に含めて考えていきたい。

土坑（第20～22図、図版5・6）

今回の調査において多くの土坑が検出され、番号を付したもので32を数える。これらの内遺物が検出されたものは皆無で、時期を明確にすることができなかった。分類すると明らかに相違のあるグループが存在し、土坑と大きな一群として括られるものではなく、多種多様な坑のグループとして取り扱うことができよう。

土坑の分類 土坑を分類する際に大きな基準となるものは、坑の規模や構造（掘り方等）、かたちを基準としている場合が多い。なお、規模特に上面形や深さの細かな数値については検出面の状況により異なりがあり、そのため概略的なまとめ方が適当であると思われる。前記したように分類基準の大きな枠は土坑の持っているかたちに依るところが大きく、群・類・種 群一類別分類は様式としての一群を示す。類一様式内の区分とする。種一遺構個々の差にまで遡ることの可能な分類。に則って今回検出された土坑を大別すると、I群（土坑の上面観が長楕円形若しくは隅丸長方形を基調とする群）II群（土坑の上面観が円形を基調とする群）に分類することができる。

また、規模や構造の要件に土層の堆積状態が加わる。特に坑の掘り方は土坑の役割に大きな影響を持っていたものと考えられ、細かな観察を必要とする要件である。これらの事例を踏まえて群別での土坑を図示し記述する。なお、土層の堆積状況を大きく分類すると、①土層が分層できない単一層のもの。②壁際に崩落したような状況を示す所謂三角堆土を持つもの。③上層にレンズ状堆積が、下層は水平堆積となるもの三つの類型が認められる。

第I群 本群は上面観が長楕円形若しくは隅丸長方形を基調にしている一群で、坑の規模や平面観の若干の相違等により数種類の類型に細分が可能であり、坑底の形態や坑底孔等の構造の状況により更に数様に細分が可能である。

第I群I類 上面プランの平面形が長楕円形となる一群で、坑底規模やその形状、坑底に穿たれている小孔の状況により細分が可能である。

第I群I類A種（第1・2・3・4・5・6・7号土坑） 上面プランの平面形が長楕円形となり、長軸規模が大きく全体規模の大きな群で、上面プラン規模は長軸2.30m～1.85m、短軸1.21m～0.78m、坑底規模は長軸1.99m～1.77m、短軸0.63m～0.43mを測り個々のバラつきが少ない。本種は開口部以下の中段・坑底

に特徴を持っている。中段・坑底の平面プランは幅の狭い隅丸長方形を基調としている。坑底の小孔は掘り方もしっかりしており、その規模は大きくなく、直径は10cm前後、深さも平均すると32.3cmと深い。坑底ピットは坑底中央部に寄った位置に2ヶ所穿たれている。土層の堆積状態は②の状態を示す。

第I群1類B種(第21・22・26・31号土坑) 上面プランの平面形がやや角の張る長楕円形となり、長軸規模が第I群1類A種よりも小さな群で、上面プラン規模は長軸1.90m～1.38m、短軸0.92m～0.56m、坑底規模は長軸1.53m～1.15m、短軸0.46m～0.40mを測り個々のバラつきが少ない。本種は開口部以下の中段・坑底に特徴を持ち、角のやや張った隅丸長方形となる。坑底の小孔は掘り方もしっかりしており、その規模は大きくなく、直径は8cm前後、深さも平均すると31cmと深い。坑底ピットは坑底中央部に寄った位置に2ヶ所穿たれている。土層の堆積状態は②の状態を示す。

第I群1類C種(第8・23号土坑) 上面プランの平面形が第I群1類A・B種よりも胴部の張る長楕円形となり、長軸規模が第I群1類A種に類似する群で、上面プラン規模は長軸2.29m～1.9m、短軸1.32m～1.07m、坑底規模は長軸1.85m～1.32m、短軸0.71m～0.44mを測り個々のバラつきが少ない。坑底の小孔は掘り方もしっかりしており、その規模は大きくなく、直径は12cm前後、深さも平均すると32cmと深い。坑底ピットは坑底中央部に寄った位置に2ヶ所穿たれている。土層の堆積状態は②の状態を示す。

第II群 本群は上面観が円形を基調にしている一群である。

第II群1類 上面プランの平面形が円形で深い掘り方を有し、断面形が開口部の大きく開く漏斗状となる一群で、坑底規模やその形状により細分が可能であると思われるが、今回の調査ではA種の1種しか確認されていない。

第II群1類A種(第14・15・17・18・20号七坑) 上面プランの平面形が円形となり、平面規模が大きく深さのある群で、上面プラン規模は長軸1.98m～1.52m、短軸1.84m～1.46m、坑底規模は長軸0.82m～0.52m、短軸0.69m～0.43mを測り個々のバラつきが少ない。本種は開口部以下の中段・坑底に特徴を持ち、断面形は開口部が大きく開く漏斗状を呈している。土坑の掘り方はしっかりしており、深さは1.24m～1.09mと深い。坑底には小孔は穿たれてはいるが、坑底中央部が凹むもの(第14号七坑)と、平坦のもの(15・17・18・20号土坑)が認められる。土層の堆積状態は③の状態を示す。

第II群2類 上面プランの平面形が円形で深い掘り方を有し、断面形円筒状となる一群である。

第II群2類A種(第19A号土坑) 平面プランが円形を呈し、断面形が円筒状を呈する。掘り方はしっかりしており、土層の堆積状態は③の状態を示す。

第II群3類 本類は第II群1類A種・B種に比べてその構造が簡易となる群で、掘り方が浅いものが主体をしめる。平面形は円形を基調とするものと、不整形形を基調とするものが認められるが、全体的に不整形形である。平面形、坑の規模、掘り方等により分類が可能である。なお、第I群に属する土坑が目的に応じた構造を有するのに対して、本群はその構造より土坑の目的を直接窺い知ることができにくいものであり、多種多様なものを内在している一群かと思われる。

第II群3類 上面観が不整形形を呈するものを一括した。土坑の規模や掘り方の状態によりA種からB種までの2種に分類できる。

第II群3類A種(第11号土坑) 上面プランや坑底プランは不整形形呈し、断面形が台形状となる種である。坑底は平坦で掘り方もしっかりしており、第II群の中でも割合整ったものである。

第II群3類B種(第9・10・12・13・16・24・25・27・28・29・32号土坑) 上面プランは不整形な円形を呈し、掘り方は割合簡易で、断面形が皿状を呈するものである。なお、坑底の上面観が不整形にゆがみ、

凹凸を呈するものが主体を占める。

土坑（第Ⅰ群・Ⅱ群Ⅰ類）の構造 今回検出された土坑を平面観や断面観を基本として分類を行ってきた。第Ⅰ群（落し穴）土坑の分類については、⁽¹³⁾ 神奈川県霧ヶ丘遺跡等において詳細に検討されている。今回本遺跡において行った土坑の分類を霧ヶ丘遺跡の分類に準拠すると、第Ⅰ群Ⅰ類A種・B種・C種はC型に相当し、本遺跡では3種に細分したが、大まかに見ると平面観が長楕円形、坑底に2ヶ所の小孔を有する構造の落し穴と捉えることができ、規模や平面形状に若干の差異はあるものの同類型と捉えてもよいのではないだろうか。なお、市域における落し穴の分類と対比すると、上の平遺跡分類第Ⅱ群2類、梵天原遺跡分類第Ⅰ群Ⅰ類B種の一部が該当するものと考えられるが、遺構の構造や規模を詳細に検討すると、遺跡間で若干の差異を有していることを指摘できよう。この遺跡間での差異が何に起因するか興味深い問題である。

第Ⅱ群Ⅰ類A種は余り類例のないものであり、同型の土坑が市域においてまとまって検出されている遺跡は上の平遺跡において第Ⅰ群4類A種・B種（Bグループ）とされる土坑で、同類型の土坑は仮称「207タイプ」土坑と総称されているものに類似し、⁽¹⁴⁾ 新潟県岩原遺跡や⁽¹⁵⁾ 飯山市下境大原遺跡等では落し穴の一つの類型として捉えられている。今回本遺跡から検出されたものもその状況が同類型の土坑が検出されている遺跡の状況と類似しており、落し穴として機能したものと考えることができよう。

今回の調査により第Ⅰ群と第Ⅱ群Ⅰ類の異なった構造を持つものが混在して検出されている。上の平遺跡では平面観が長楕円形の類型のものと、円形のもの2者の存在は時間差や、構造差を上坑を構築した者の集団差と捉えており、本遺跡でも同様なことが考えられようか。

第Ⅰ群の構造の特徴の一つに坑底に穿たれた小孔の状態にある。これを基準に種別分類を行ったが小孔の掘り方や規模、その位置に着目すると、掘り方が丹念で深さもあるものが中心となり、1ヶ所の小孔に複数の逆茂木を立てるような構造のものは認められず、坑底中央部に寄った位置に長軸に沿った形で2本立てる構造のものが普遍的である。

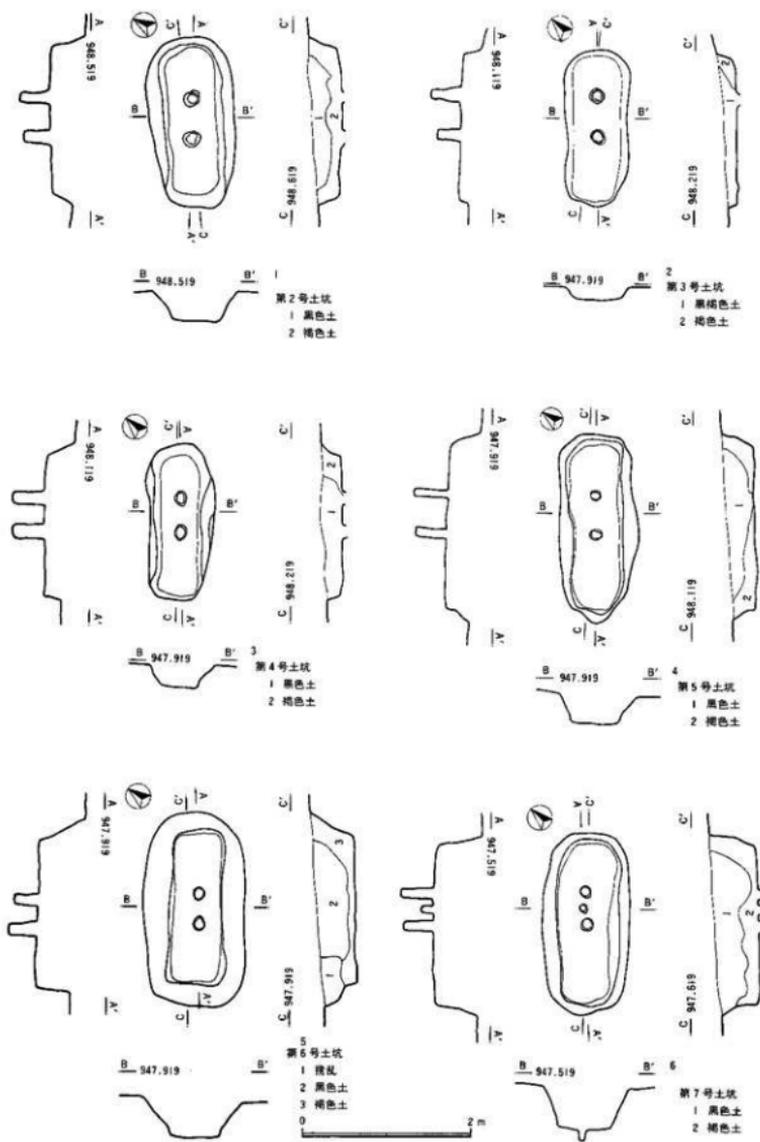
土坑の土層の堆積 土坑の土層状況についてはその堆積状況より単一土層①、自然堆積土層②③にまとめることが可能であろう。検出された土坑の土層、特に第Ⅰ群、第Ⅱ群Ⅰ類の土坑について、その堆積状態についてローム層の堆積状況に着目すると、大きく2グループに分類することが可能である。

Aタイプ 坑底や壁際にローム系土層が堆積し、その上部には黒褐色土や黒色土が割合規則的にレンズ状に堆積するものである。坑底に堆積するローム系土層は詳細に観察するとロームの状況は細粒子となる状況を呈し、自然堆積を思わせる。

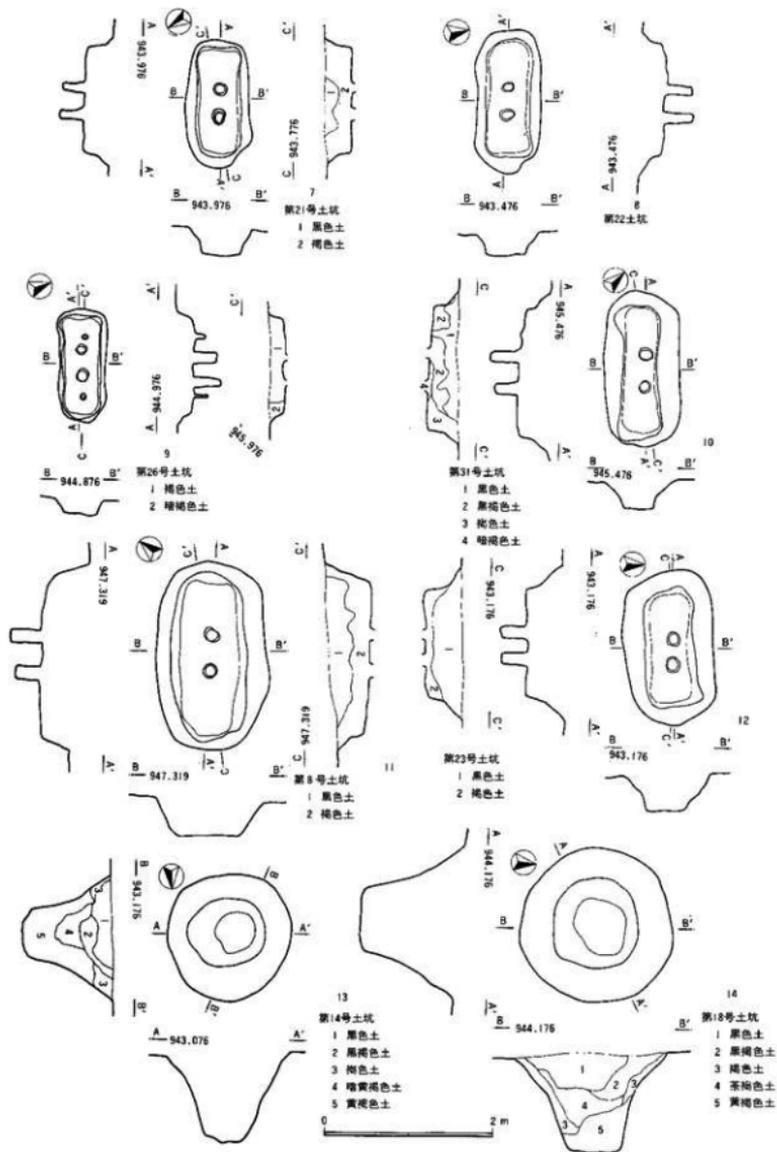
Bタイプ Aタイプには基本的な形では同様であるが、上層の堆積状態が複雑なものである。本タイプは特徴的な土層堆積を示すタイプで、第Ⅱ群Ⅰ類特有の土層堆積である。この傾向は同類型の上坑が検出されている上の平遺跡のものも同様な傾向を示す。

これらの2タイプの上層の堆積状態が如何なる要因により生じたかを考えてみると、A・Bタイプ共にローム系土層の状況より類推すると、坑底に堆積するこれらの土層は土坑の壁等が冬季の凍結等の影響による崩落、または流れ込みによる結果と捉えることができよう。また、この土層上に堆積する黒色土系土層の堆積状況はレンズ状堆積を基本とする点から、自然堆積の状況を示すものと考えられよう。今回検出された土坑内で人為的埋没と考えられるようなロームと黒色土の互層を示す土層等を認めることはできず、土坑の再利用等を認めることはできず、全ての第Ⅰ群の土坑は短期間の利用として捉えることができよう。

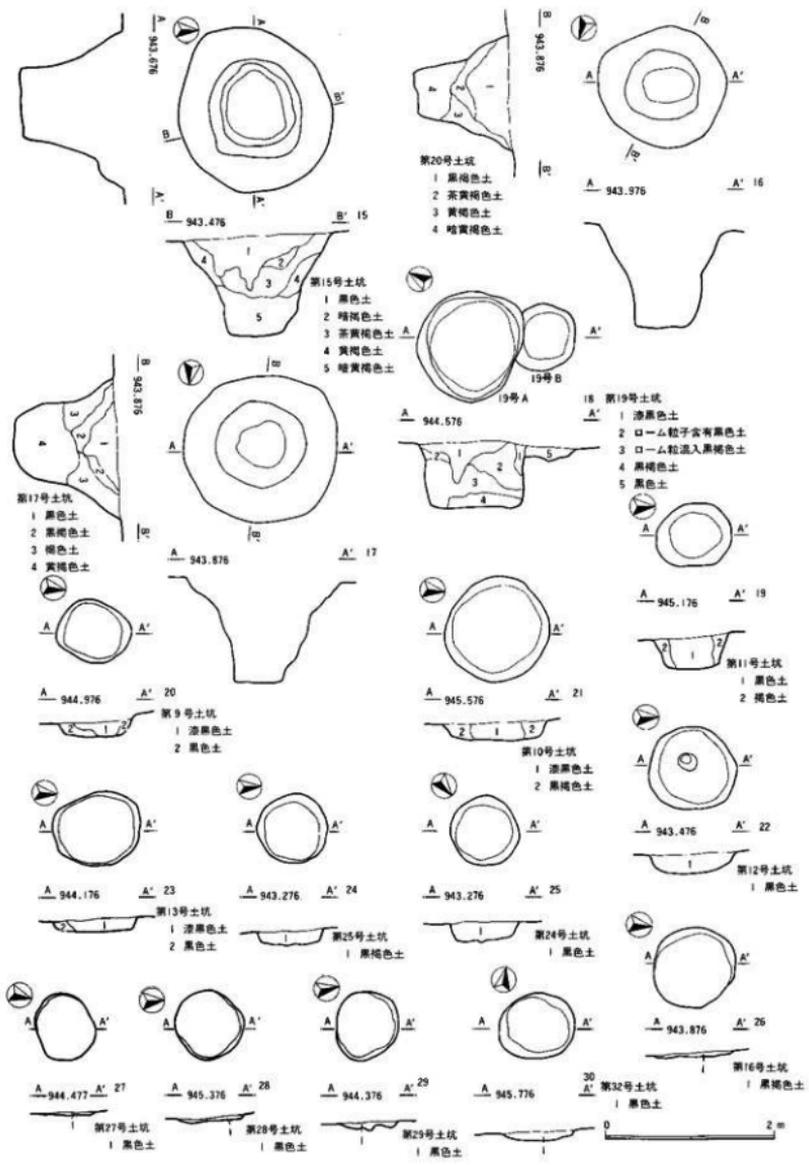
土坑（第Ⅰ群・Ⅱ群Ⅰ類）の時期について 遺跡内や土坑内より時期を決定でき得る出土遺物がないこと



第20图 土坑(1) (1/60)



第2图 土坑(2) (1/60)



第22图 土坑(3) (1/60)

もあり、遺構の時期を明確に示すことはできず、第Ⅰ群・Ⅱ群Ⅰ類で重複関係を有しているものはなく、土坑の類型に多様性がなく、これらが一定の群別となり列をなす点などを考えると、土坑群は割合短期間の所産と取り扱うことができよう。しかし、類型差のあるもの（第Ⅰ群・Ⅱ群Ⅰ類）が認められる点などより、ある程度の時間差を有して構築されたものと考えられることができる。

第Ⅰ群・Ⅱ群Ⅰ類土坑の分布状態 今回の調査により得られた土坑は32を数えるが、その量は決して多い量とは言えず、遺構の分布密度は低いと言える。土坑が調査区約4,600m²の空間より検出されているが、土坑は調査区全体に満遍なく散在するのではなく、類型によりある程度のグループを有して分布していることを捉えることができる。

調査区の地形は南側に緩斜面となる台地であるが、部分的に浅い谷が南西-北東方向に走っている。この浅い谷を挟むように直線状に第Ⅰ群土坑が展開する。第Ⅰ群の土坑はこの谷を囲むように分布する傾向が窺え、全体の配列観はやや崩れたV字形を呈する。土坑の類型別に分布状態を概観すると類型差により若干の偏在性を認めることができる。

第Ⅰ群の土坑の配列は類型同志で一定の配列を形作り、ある程度の計画の基に第Ⅰ群の土坑は配されたものと考えられる。落し穴が一定の配列の基に配されている点について、狩猟対称となった動物の獣道に関わるものではないかとの考え方もなされているが、土坑の類型によって占地域に差異が認められる点などを加味すると、時期的な問題や獣道に加え狩猟方法も土坑の配列に大きく関わっていた可能性も考えられる。想像を豊かにするならば浅い谷を意図的に囲む第Ⅰ群の落し坑群は、集団による落し穴猟用に使われたものとして捉えることができようか。



第23図 縄文時代土坑の分布状況

第1表 久保御堂遺跡土坑一覽表

探洞番号	遺跡番号	検出位置	上端埋深(m)		F埋深(m)		長軸方向	(mm)	坑底E-Z		中段	土坑類型	出土遺物	上層段階	備考
			長軸	短軸	F埋深	埋深			E-Z埋深	埋深(m)					
第4回	第1号土坑	7-5	1.96	0.85	1.70	0.61	N-56-W	36	33.5	28.5	有	I第1類A坑	②947		
第20回1	第2号土坑	R-23	2.45	1.03	1.78	0.56	N-62-E	42	35.0	32	有	I第1類A坑	②947		
第20回2	第3号土坑	U-20	1.90	0.94	1.77	0.57	N-42-E	31	35.5	27	有	I第1類A坑	②947		
第20回3	第4号土坑	V-19	1.91	0.78	1.70	0.43	N-44-E	39	37.5	36	有	I第1類A坑	②947		
第20回4	第5号土坑	V-19	2.30	0.93	1.99	0.56	N-55-E	45	40.5	35	有	I第1類A坑	②947		
第20回5	第6号土坑	W-18	1.85	1.21	1.79	0.56	N-55-E	59	34	34	有	I第1類A坑	②947		
第20回6	第7号土坑	X-17	2.19	1.05	1.92	0.63	N-44-E	43	35.5	11.5	有	I第1類A坑	②947		
第22回10	第8号土坑	Y-16	2.29	1.82	1.85	0.71	N-55-E	55.5		29	有	I第1類C坑	②947		
第22回21	第9号土坑	I-15	0.86	0.74	0.66	0.62	N-0-E	18				I第3類B坑	②947		
第22回22	第10号土坑	I-16	1.25	1.24	1.05	0.96	N-41-W	12				I第3類B坑	②947		
第22回19	第11号土坑	I-15	0.90	0.75	0.59	0.54	N-14-W	38				I第3類A坑	②947		
第22回22	第12号土坑	H-9	1.05	0.99	0.81	0.89	N-0-E	24				I第3類B坑	②947		
第22回23	第13号土坑	G-12	1.01	0.84	0.89	0.81	N-9-E	15				I第3類B坑	②947		
第23回13	第14号土坑	F-9	1.57	1.46	0.52	0.46	N-25-E	109				I第1類A坑	②947		
第22回15	第15号土坑	E-11	1.98	1.84	0.82	0.69	N-3-E	124				I第1類A坑	②947		
第22回26	第16号土坑	E-12	1.01	0.96	0.90	0.85	N-30-E	6				I第3類B坑	②947		
第22回17	第17号土坑	E-13	1.84	1.80	0.56	0.52	N-90-W	124				I第1類A坑	②947		
第22回14	第18号土坑	D-14	1.89	1.86	0.76	0.60	N-33-E	115				I第1類A坑	②947		
第22回18	第19A号土坑	D-16	1.33	1.30	1.00	1.05	N-47-E	76				I第2類A坑	②947		
第22回18	第19B号土坑	D-16	0.86	0.77	0.64	0.59	N-80-E	17				I第3類B坑	②947		
第22回16	第20号土坑	B-14	1.82	1.48	0.60	0.43	N-65-E	123				I第1類A坑	②947		
第22回7	第21号土坑	B-13	1.74	0.77	1.35	0.46	N-87-W	29	29	29	有	I第1類B坑	②947		
第22回12	第22号土坑	C-11	1.90	1.07	1.32	0.44	N-67-E	43	31	32	有	I第1類C坑	②947		
第22回25	第23号土坑	C-11	0.85	0.80	0.66	0.70	N-10-E	25	33	34	有	I第3類B坑	②947		
第22回24	第23号土坑	A-10	0.86	0.85	0.72	0.65	N-3-E	18				I第3類B坑	②947		
第22回9	第26号土坑	C-18	1.38	0.56	1.15	0.40	N-76-E	19	28		有	I第1類B坑	②947		
第22回27	第27号土坑	C-17	0.81	0.69	0.78	0.77	N-46-E	4				I第3類B坑	②947		
第22回28	第28号土坑	F-18	0.85	0.79	0.71	0.71	N-43-E	5				I第3類B坑	②947		
第22回29	第29号土坑	H-18	0.80	0.79	0.79	0.73	N-67-E	12				I第3類B坑	②947		
第22回30	第30号土坑	D-21	0.89	0.87	0.75	0.64	N-32-E	32				I第3類B坑	②947		
第23回10	第31号土坑	E-31	1.90	0.92	1.53	0.36	N-51-W	47	2	24	有	I第1類B坑	②947		

第3節 縄文時代・平安時代・中世・近世の遺物

調査が遺跡の主体部から外れていたことや、住居址の上面部が耕作により攪乱され、遺存状態が悪かったこともあり、出土した遺物は少なく、完全に復元された土師器はなく、遺構の節において記述したものはその全てが図上において器形復元したものである。遺物の内訳は表面採集による遺物も含めると、縄文時代早期押型文土器片1、縄文時代中期初頭土器片3、黒曜石石鏃未製品1、ドリル1、両極打法により生じた剥片3、黒曜石原石2、砕片11、剥片16、打製石斧3、横刃型石器1、磨石2、平安時代土師器坏片23、甲斐型皿片1、黒色土器坏片37、黒色土器碗片1、皿片9、小型甕片44、長胴甕片363、武藏型甕片16、須恵器坏片4、甕片7、灰胎陶器碗片15、中世内耳土器片29、大塚期鉄軸碗片5、鉄軸卸皿片1、灰胎丸碗片4、志野丸碗片1、志野丸皿片2、常滑窯甕片2、明青磁瓶片2、火打石1、近世瀬戸窯本業焼期灰軸碗片1、鉄軸碗片1、染付碗片1、染付広東茶碗片1、肥前系染付磁器碗片3、常滑窯急須片1が検出されており、量的には多くはないものの、縄文時代・平安時代・中世から近世に亘る幅広い時期の遺物が得られている。

1. 縄文時代の遺物の概要

今回の調査により得られた縄文時代の遺物は、早期押型文土器片1、中期初頭土器片3、黒曜石製石鏃未製品1、ドリル1、両極打法により生じた剥片3、黒曜石原石2、砕片11、剥片16、打製石斧3、横刃型石器1、安山岩製の磨石2が検出されているだけである。調査面積に比較してその量は微量である。磨石と両極打法により生じた断片を除き全てが遺構外からの出土であり、また、それぞれに時期を示すような特徴も具備していないために属層時期は不明であるが、一応全体を縄文時代のもものとして取り扱っておく。

押型文土器 (第24Ⅸ1) 小片のために器形等を窺い知ることはできないが、口唇部が平坦でやや外反する傾向が見られる。施文は器表面・口唇部・口縁内側に横位帯状に山形文が施文されている。胎土中には1mm以下の白色砂粒子を2%程度含有する。焼成は硬質で堅緻な傾向を示している。色調は橙褐色(7.5YR6/6)を呈する。

中期初頭土器 (第24Ⅹ2) 口縁部から胸部上半に至る部位かと思われ、口縁部側に縄文地文上に半割地竹管状工具による縦位平行沈線が施文され、口縁部と胸部上半の境には半割竹管状工具による平行浮線文が横位に配される。胎土中には1mm以下の白色砂粒子を3%程度含有し、焼成は良好で色調はふい赤褐色(5YR5/4)を呈する。

ドリル (第24Ⅹ11) 不純物の少ない黒曜石を素材としている。素材剥片は自然面を残す端部が広がる割合厚手の主要剥離面を有する剥片を用いている。完形で遺存しており、全体形は約半分が尖端部、基部となり、基部が大きな筒状となる。全長3cm、幅2cm、重量3.1gを測る。尖端調整は割合片全てが側縁部と先端部を中心に調整剥離がなされており、断面は整った凸レンズ状を呈する。なお、先端部には磨痕状と小さな剥離状の使用痕が認められる。

両極打法により生じた剥片 (第24Ⅹ12・13) 12は不純物を含まない半透明の黒曜石を用いている。全長3.3cm、幅1.3cm、重量3.4gを測る。本資料は両極打法を用い石核を分割する際に生じた剥片と考えられ、主要剥離面を残し、両端には両極打法特有の階段状剥離が認められる。13も12と同様な両極打法を用いて石核を分割した際に生じた剥片で、全長2.4cm、幅1.2cm、重量2.1gを測る。下端には明瞭な階段状剥離は認められなかったものの、折れたような痕跡が認められる。両極打法による剥離の痕跡は、断片全面には至ってはならず自然面を残留する。

打製石斧 (第24Ⅹ18) 変質輝緑岩製の厚手の剥片を素材とし、現在長8.2cm、幅4.1cm、重量64.5gを測

る。先端部と側縁部を欠損しており、全体の約1/2が遺存しているに過ぎない。遺存している部分より見ると、平面観は基部が丸みを有する短冊型の形状を想定できる。

磨石 (第24図9・10) 9は長さ14.9cm、幅8cm、重量533gの平面観が不整形円形を呈する中型の安山岩の自然円礫を素材としている。磨痕は礫全面には認められず、最も平坦な素材礫の片面と側面に認められるだけである。また、磨痕の状態は素材礫の表面が磨り潰れるほどの状況は呈してはいない。そのために明瞭な面を形成するような磨痕を認めることはできず、断面形は楕円形となる。また、敲打痕が正面・側面に認められる。10は長さ13.1cm、幅7cm、重量896gの平面観が不整形円形を呈する大型の安山岩の自然円礫を素材としている。磨痕は礫全面には認められず、最も平坦な素材礫の片面と側面に認められるだけである。また、磨痕の状態は素材礫の表面が磨り潰れるほどの状況は呈してはいない。そのために明瞭な面を形成するような磨痕を認めることはできず、断面形は楕円形となる。また、敲打痕が側面に認められ、この部分がやや挟入状となっている。

縄文土器の時間的位置付け 縄文土器は早期押型文と中期初頭の土器が得られている。早期押型文土器は山形文の施文状況より樋沢遺跡押型文土器群の構成単位分類に従うと、山形文E1タイプに帰属でき、楕円式に該当するものと思われる。中期初頭の土器は半割竹管状工具による浮線文の在り方から、⁽¹⁸⁾三上氏分類に従うと沈線文系I段階に帰属し、梨久保式に該当するものと思われる。該期の住居址が遺跡南西側台地縁辺に検出されており、この資料はこれらの遺構に関連するものであろう。

2. 平安時代遺物の概要

平安時代に帰属すると思われる遺物は遺構外出土の資料も含めて土器類でその内訳は、土師器坏片23、甲斐型皿片1、黒色土器坏片37、黒色土器碗片1、皿片9、小型甕片44、長頸甕片363、武藏型甕片16、須恵器坏片4、甕片7、灰釉陶器碗片15が得られている。遺構内から検出されたものについては極力資料化に努め、本節においては遺構外遺物の内器形復元の可能な資料を提示した。

黒色土器碗 (第24図3) 付高台を有する碗底部である。見込部は黒色処理され所謂「ススキ状暗文」が施される。胎土中には1mm以下の長石細粒子を2%含有し、堅緻で緻密である。色調は鈍い褐色(7.5YR5/4)を呈する。詳細な器形は不明であるが、見込部の黒色処理と暗文に着目すると、同類の黒色土器碗は稗田頭A遺跡第1号・3号・4号住居址、稗田頭C遺跡第1号住居址、鴨田遺跡第14号住居址等に認められる。

灰釉陶器碗 器形復元の可能な資料はなく図示はされていないが、碗体部破片15片が表面採集で得られている。素地等や施釉の状況より東濃産のものと考えられる。

平安時代土器の特徴と細分 本遺跡遺構内出土の平安時代土器の特徴と、細分について概観してみる。土師器坏・黒色土器坏は方量的に口径が15cm~17cmの大振りのものと、13cm前後の中振りの2者が認められる。坏はロクロ成形で、プロポジションは体部に丸みを有し、やや口縁部が外反する傾向のものである。内面処理は土師器坏・黒色土器共に丹念な研磨がなされている。須恵器坏は体部にやや丸みを有し、焼成が灰白色軟質となり特徴を持つ。1点だけ「甲斐型皿」が検出されている。小片のために詳細は不明ではあるが、口唇端部が弱いながらも玉縁状となり、口縁部と体部の境が不明瞭なものである。土師器甕は特徴的なもので、長頸甕は内外面にハケナデ整形を施す「甲斐型甕」とへら削整形の「武藏型甕」が認められる。「甲斐型甕」は口縁部長1.8cm~2.3cm、厚さ0.7cm~0.9cmを測り、断面形が角のやや丸い方形を呈する。口縁部の外面はナデ整形を一般的とするが、口縁部内面はナデ整形のものを中心とするが、ハケナデ後ナデ整形を施すものや、ハケナデのみのものが認められる。保坂氏の「甲斐型甕」⁽²¹⁾の分類に従えば、今回検出された資料は薄口縁型と厚口縁型の中間的な様相を呈している。小型甕にはロクロ成形で横位カキメ整形のものが主

体を占めるが、第24図3のような体部が擬位ハケナテ整形がなされる特徴的なものも認められる。

平安時代土器の構成について 本遺跡における遺構内出土平安時代の土器の構成は、食膳具・土師器環・皿・黒色土器環・須恵器環、煮沸具・土師器長胴甕・小型甕の構成を基本とするが、第2表に示したように土師器皿・須恵器環は全ての住居址には認められず偏りが認められる。土師器長胴甕は普遍的な在り方を示し、「甲斐型甕」が主体を占め「武蔵型甕」が若干混じる。市域における八ヶ岳山麓における平安時代の遺跡で本遺跡と同様な土器構成を示すものとして、茅野和田遺跡西第10号住居址、山寺遺跡第4号住居址、立石遺跡第11号住居址を挙げることができる。

平安時代土器の時間的位置付け 今回の調査で直接土器の時期を窺い知ることのできる資料は得られてはいない。しかし、いくつかの傍証資料を提示すると、食膳具に軟質須恵器環が含まれ、灰釉陶器碗類欠落する点などや、また、煮沸具に「武蔵型甕」を持つことなどが一つの鍵となろう。諏訪地方における平安時代土器編年は、諏訪市十二后遺跡の資料を基に笹沢浩氏が提唱したものがある。これに沿って考えると、軟質須恵器の存在と灰釉陶器環の欠落の在り方や土師器環、小型甕の構成から第VII期（10世紀後半）とすることもできるが、「甲斐型甕」「甲斐型皿」はX期（9世紀末）に比定でき前者と大きな時間的な隔りがある。⁽²²⁾そこで近隣地に位置する塩尻市吉田川西遺跡の土器の変容に沿って考えてみると、軟質須恵器環・土師器環・黒色土器環・土師器皿・小型甕の組合せはS B111段階（9世紀末）に比定することができる。これらの点より本遺跡の土器群の位置付けを9世紀末頃としたが、今後八ヶ岳西南麓の集成等も含めて再考する必要がある。なお、遺構内出土の資料について概観してきたが、遺構外資料として図示した黒色土器碗や灰釉陶器碗はその特徴より遺構内土器とは分離できそうで、黒色土器碗の暗文の在り方や灰釉陶器碗の施釉方法が、濱け掛け施釉である点などより後出のものと考えることができ、本遺跡は2時期のものを含んでいるものと捉えることができ、住居址の分布等を加味すると、保存地区に埋没した平安時代の堅穴住居址がこの時期に該当する可能性が高い。

3. 中世遺物の概要

中世に帰属すると思われる陶器片等は、中世内耳土器片29、大窟期鉄釉碗片5、鉄釉卍皿片1、灰釉丸碗片4、志野丸碗片1、志野丸皿片2、常滑窯甕片2、明青磁瓶片2、火打石1が得られている。これらの遺物を概観すると、国産陶器類は全て中世大窟期に帰属するもので、輸入磁器も国産陶器類と大過ない時期のものである。検出されたものの内志野丸皿、灰釉丸碗、鉄釉卍皿を器形復原し図示した。

志野丸皿（第24図4） 削り出し高台を有する丸皿底部である。高台径は6.4cmを測り、低く断面形は方形を呈する。釉は全面に長石釉が施される。釉色は灰白色（N7/0）を呈し、大きな貫入が入る。素地は灰白色（5GY8/1）を呈し、やや軟質な傾向を示す。なお、外底面に凹錐ピン痕を残す。施釉状況や器形等より志野丸皿第2型式かと思われ、特徴等より大窟第10小期に帰属させることができ、16世紀後半の年代観を与えることができようか。

灰釉丸碗（第24図5） 付高台を有する丸碗底部である。高台径は4.2cmを測り、付高台で断面は端部のやや尖った形を呈する。釉はほぼ全面に灰釉が施される。釉色は明緑灰色（10GY7/1）を呈し、細かな貫入が入る。素地は灰白色（2.5GY8/1）を呈し、やや軟質な傾向を示す。施釉状況や器形等より丸碗（小）に帰属させることができ、施釉状況等より16世紀の年代観を与えることができようか。

鉄釉卍皿（第24図6） 削り出し高台を有する卍皿底部である。高台径は8.2cmを測り、高台断面形は三角形を呈する。卍皿はへら状工具により縦く描かれる。釉は全面に鉄釉が全面に施される。素地は灰白色（2.5GY8/1）を呈し、やや軟質な傾向を示す。高台を有する点や鉄釉を施する点などより審窟期のもとは一

線を画し、特徴より大塚Ⅰ期に見られる丸皿形の卸皿に帰属させることができ、15世紀終末から16世紀前半の年代を与えることができよう。

中世陶磁器の構成について 今回の調査により得られた中世陶磁器は内耳土器、鉄軸碗、鉄軸卸皿、灰釉丸碗、志野丸碗、志野丸皿、常滑窯、明青磁瓶が認められている。器種では食膳具・煮沸具・貯蔵具・調度具の器構成となり、器種による片寄り等は認められないが、カワラケが認められないことに特徴を持つ。数量的には煮沸具である内耳土器が主体となり食膳具が次ぐ。この傾向は本地域の一般的な在り方であるが、2点検出されている明青磁瓶の在り方に興味深いものがある。

市域における八ヶ岳西南麓の中世遺物の検出されている遺跡は山寺遺跡・中尾遺跡・日向遺跡・塩之目尻遺跡・梨ノ木遺跡・師岡平遺跡・上の平遺跡を挙げることができる。これらの遺跡では内耳土器を主体とし、若干の常滑窯、大塚期灰釉丸碗が含まれる形を基本としているが、これらに比べ本遺跡の場合卸皿や青磁瓶を含むこと等に特徴を持っている。隣接する師岡平遺跡においては本遺跡の器構成に加えて複雑となっており、これらの点から考えても本遺跡は、師岡平遺跡に付随するものと捉えることもできようか。

中世陶磁器の時間的位置付け 食膳具の中心となる丸皿・丸碗・卸皿はその特徴より大塚期の製品で、丸皿・丸碗は16世紀後半に帰属できるが、卸皿はこれらの製品よりもやや古い段階のもので、時間幅を認めることができる。隣接する師岡平遺跡の状況は12世紀後半から16世紀後半の資料が得られており、中世の割合幅広い時期に亘る継続した集落と捉えられるのに対して、本遺跡の場合は16世紀特に後半を中心とした遺物の検出より16世紀後半を中心とする集落と捉えることができよう。

これらの中世陶磁器は全て表採品で、遺構等に供伴するものではないが、試掘時に遺跡内西側範囲に孤立柱礎物趾の柱穴と考えられるようなピットが数ヶ所検出されており、中世遺物はこれらの遺構に伴うものであろうか。また、谷を挟んだ南側台地には師岡平遺跡の中世村落址が検出されており、この集落との関連も含めて考慮する必要があろう。

4. 近世遺物の概要

近世に帰属すると思われる陶器片は、瀬戸窯本業焼期灰釉碗片1、鉄軸碗片1、染付碗片1、染付広東茶碗片1、肥前系染付磁器碗片3、常滑窯急須片1が3点検出されている。検出された陶器片は小片が主体を占め図示できたものは染付広東茶碗1点だけである。

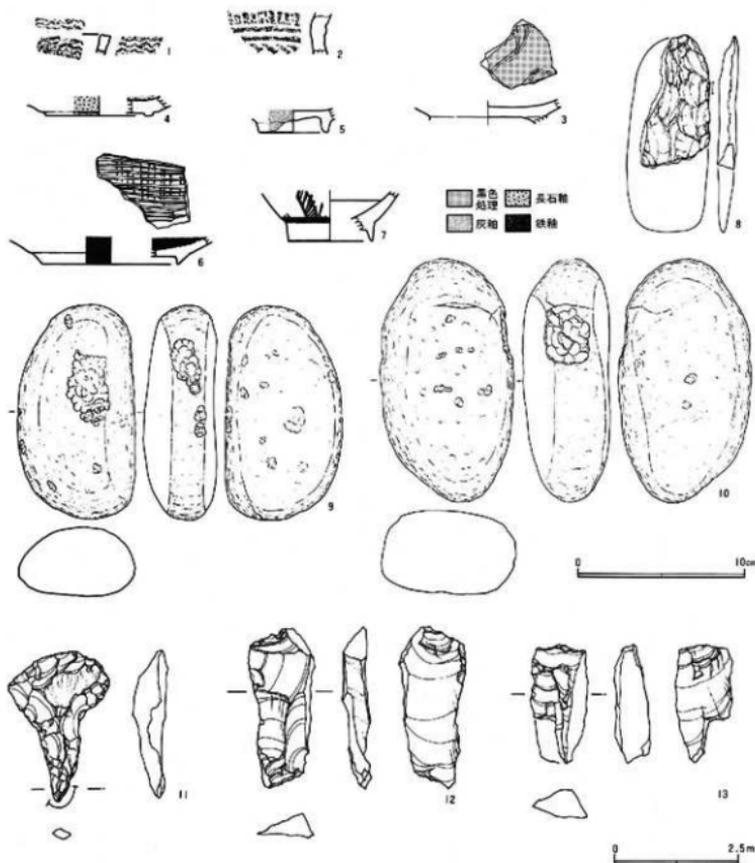
染付広東茶碗(第24図7) 高台部だけが遺存していたために全体の器形を窺うことはできないが、高台部のあり方等より染付広東茶碗とした。高台径は5.1cmを測り断面形は三角形を呈し、高台内側は高い。体部に木葉文の呉須絵が描かれ、透明釉が施釉される。同様な製品を瀬戸有右衛門窯・丕兵衛窯に見ることができる。施釉状況や器形等より広東茶碗第2型式か⁽²⁷⁾と思われ、特徴等より本業焼第10小期に帰属させることができ、19世紀中頃の年代観を与えることができよう。

近世陶磁器類の構成について 検出された資料は全て表採資料であり、セット等を把握でき得る状態ではない。しかし、検出傾向を概観すると、染付碗を中心に灰釉碗や鉄軸碗が加わる。このように食膳具を中心とした在り方は、市域において近世陶磁器が検出されている棚畑遺跡や高風呂遺跡、梵天原遺跡、師岡平遺跡等の例に類似し、近世陶磁器散布地遺跡の一般的な在り方として捉えることができよう。

近世陶磁器類について 検出された資料は本遺跡内の遺構に直接関わるものではなく、また、近世にこの地が居住域等として利用されたために遺物が遺存するのではなく出土状況を考慮すると、全て耕作等により堆肥等に混ざって他から入り込んだ廃芥と考えることができ、この地が耕地として利用されていた時期の幅を示す重要な資料である。図示した資料について19世紀後半の年代観を与えたが、図示しなかった肥前系染

付磁器碗などは18世紀後半に帰属できるものが認められ、遺跡内での近世陶磁器の幅は18世紀後半から19世紀後半までのもので、市域で検出されている近世陶磁器の在り方と大過ない在り方である。18世紀後半から19世紀後半は、八ヶ岳山麓一帯の新しい用水汐の開削による農地拡大が図られた時期であり、このような動きに合わせて近世陶磁器片が耕地にもたらされたものであろう。このような近世陶磁器小片と雖も貴重な歴史的資料で、地域の開発等の歴史的状況を探る上の一つの大きな手掛かりになるものであろう。

今回の調査により得られた資料について概観してきたが、縄文時代に限ると木遺跡の遺物の量は少量で、貧弱な集落址と捉えることができよう。平安時代に限ってみれば、遺物の在り方は一般的なものと云え、今回調査された平安時代の集落は当時のある程度まとまった単位の集落と捉えることができようか。



第24図 検出された遺物（遺構外）（1～10は1/3、11～13は1/1）

第2表 久保郷宮遺跡遺構内出土遺物数一覧

種別	土						陶						須						備考
	口縁	体部	底部	口縁	体部	底部	口縁	体部	底部	口縁	体部	底部	口縁	体部	底部	口縁	体部	底部	
第1号住居址	黑色土器 式藏型 甲斐型	2	1	1					3										<ul style="list-style-type: none"> ・黑色土器62個体以上 ・式藏型葉は同一朝体
第2号住居址	黑色土器 式藏型 甲斐型	2	8	10	1				4	2	3	1	10	4				7	<ul style="list-style-type: none"> ・坏は2個体以上、皿は1個体以上 ・黑色土器坏は6個体以上 ・式藏型葉は1個体
第3号住居址	黑色土器 式藏型 甲斐型	1	1	1								1	1	1				2	<ul style="list-style-type: none"> ・坏は1個体以上 ・式藏型葉は1個体 ・甲斐型坏1個体
第4号住居址	黑色土器 式藏型 甲斐型	4	1	1								1	1	1				5	<ul style="list-style-type: none"> ・坏は5個体以上、皿は3個体以上 ・式藏型葉は1個体
																		4	
第5号住居址	黑色土器 式藏型 甲斐型	2																1	<ul style="list-style-type: none"> ・土師器葉は1個体、須化器葉は1個体 ・黑色土器坏は2個体
																			2

第3表 久保御堂遺跡住居址出土土器観察表

住居址番号	種類番号	器種	口径	器形	製作技法	焼成・胎土・色調	残存率
第1号住居址 カマド内	第7図1	黒色土器坏	口径17.1 器高— 底径—	口縁部直線状に開く 体部下半丸みを有する	体部横ナデ・ロクロ成形 内面黒色処理	焼成 良好 胎土 白色陶土+薄鉄細粒子7% 色調 褐色(2.5YR6/8)	口縁部16.9%
第1号住居址 覆土内	第7図2	須恵器坏	口径— 器高— 底径—	口縁部直線状に開く 体部下半丸みを有する	体部横ナデ・ロクロ成形	焼成 やや軟質 胎土 1mm以下黒色細粒子2% 色調 灰白色(7.5Y7/1)	
第1号住居址 カマド	第7図3	土師器小型壺	口径17.5 器高— 底径—	口縁部やや内彎 体部下半丸みを有する	口縁部横位ハケナデ 体部縦位ハケナデ成形+体部横ナデ	焼成 良好・堅緻 胎土 白色、薄鉄細粒子3% 色調 褐色(5Y6/6)	口縁部13.8%
第1号住居址 覆土	第7図4	土師器片割壺	口径— 器高— 底径—	口縁部「く」字状に外反 体部上半やや丸みを有する	口縁部横位ナデ 体部縦位ハケナデ成形内面横位ハケナデ	焼成 良好 胎土 長石粒子、雲母粉10% 色調 明赤褐色(2.5YR5/6)	
第1号住居址 カマド	第7図5	土師器片割壺	口径— 器高— 底径—	口縁部「く」字状に外反 体部直線状に開く	口縁部横位ナデ 体部縦位ハケナデ成形内面横位ハケナデ	焼成 良好 胎土 長石粒子、雲母粉10% 色調 赤色(10R5/8)	
第1号住居址 カマド	第7図6	土師器片割壺	口径28.7 器高— 底径—	口縁部「く」字状に外反 体部直線状に開く	口縁部横位ナデ・ロクロ成形 体部縦位ハケナデ成形内面横位ハケナデ	焼成 良好 胎土 長石粒子、雲母粉7% 色調 明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁部12.2%
第2号住居址 カマド内	第10図1	黒色土器坏	口径16.7 器高— 底径—	口縁部直線状に開く 体部下半丸みを有する	体部横ナデ・ロクロ成形 内面黒色処理・丹念な研磨	焼成 良好 胎土 砂粒子・小雲母粉3% 色調 にぶ・赤褐色(5YR5/4)	口縁部16.8%
第2号住居址 カマド内	第10図2	黒色土器坏	口径15.2 器高— 底径—	口縁部直線状に開く 体部やや直線的	体部横ナデ・ロクロ成形 内面黒色処理・丹念な研磨	焼成 良好・堅緻 胎土 砂粒子・小雲母粉2% 色調 褐色(5YR7/6)	口縁部19.7%
第2号住居址 カマド内	第10図3	土師器壺	口径13 器高2.3 底径6.5	口縁部直線状に開く 体部下半丸みを有する 底部断面方形の付当台	体部強い横ナデ・ロクロ成形 内面丹念な研磨 外底面回転糸切り後十字清し	焼成 良好・堅緻 胎土 砂粒子・薄鉄粉3% 色調 褐色(2.5YR6/6)	口縁部25.5%
第2号住居址 カマド内床下	第10図4	須恵器坏	口径— 器高— 底径—	口縁部直線状に開く 体部下半丸みを有する	体部横ナデ・ロクロ成形	焼成 軟質 胎土 砂粒子3% 色調 灰白色(7.5Y7/1)	口縁部15.8%
第2号住居址 カマド	第10図5	土師器小型壺	口径13 器高(12) 底径5.7	口縁部「く」字状に外反 体部下半丸みを有する	口縁部横位ハケナデ 体部縦位ハケナデ成形内面横位ハケナデ 底部回転糸切り	焼成 良好 胎土 細かな砂粒7.1% 色調 赤褐色(10R6/8)	頸部16.6% 底部45.8%
第2号住居址 カマド	第10図6	土師器片割壺	口径23.2 器高— 底径—	口縁部「く」字状に外反 体部直線状に開く	口縁部横位ナデ 体部縦位ハケナデ成形内面横位ハケナデ	焼成 良好 胎土 長石粒子、雲母粉10% 色調 明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁部15%

第4表 久保御堂遺跡住居址出土土器観察表

住居址番号	検出番号	器種	法量	器形	製作技法	焼成・胎土・色調	残存率
第3号住居址 覆土内	第12図1	土師器杯	口径14.3 器高4.2 底径6.6	口縁部直線状に開く 体部下丸みを有する	体部横ナデ・ロクロ成形 内面丹念な研磨	焼成 良好 胎土 1mm以下白色細砂子3% 色調 赤色(10R5/8)	口縁部11.6%
第3号住居址 覆土内	第12図2	甲斐型甕	口径— 器高— 底径—	口縁部直線状に開く 体部下丸みを有する	体部横ナデ・ロクロ成形	焼成 良好・堅緻 胎土 1mm以下白色細砂子3% 色調 褐色(5YR6/6)	
第4号住居址 カマド	第15図1	土師器杯	口径12.2 器高(4) 底径—	口縁部やや外反 体部下丸みを有する	口縁部横位ナデ・ロクロ成形 内面丹念な研磨	焼成 良好 胎土 白色細砂子3%、黄褐色砂子2% 色調 明赤褐色(5YR5/6)	口縁部12.2%
第4号住居址 カマド	第15図2	土師器杯	口径— 器高— 底径—	口縁部やや外反 体部上半やや丸みを有する	口縁部横位ナデ・ロクロ成形 内面研磨	焼成 やや軟質 胎土 黄色細砂子、黄褐色砂子3% 色調 浅黄褐色(10YR8/4)	
第4号住居址 火1	第15図3	土師器杯	口径— 器高— 底径—	口縁部やや外反 体部やや丸みを有する	口縁部横位ナデ・ロクロ成形 内面研磨	焼成 やや軟質 胎土 灰色細砂子、黄褐色砂子7% 色調 褐色(7.5YR6/6)	
第4号住居址 覆土	第15図4	土師器長頸瓶	口径— 器高— 底径—	口縁部やや外反	口縁内部横位ハケナデ	焼成 良好 胎土 1mm以下灰土、黄褐色砂子10% 色調 赤色(10R5/6)	
第4号住居址 カマド内	第15図5	土師器長頸瓶	口径— 器高— 底径—	口縁部「く」字状に外反 体部下丸みを有する	体部横ナデ 内面黒色処理・丹念な研磨	焼成 良好 胎土 粉砂子・小黒母砂3% 色調 にこ・木褐色(5YR5/4)	口縁部16.8%
第5号住居址 床下土坑内1	第17図1	黒色土器片	口径— 器高— 底径—	口縁部外反 体部やや直線的	口縁部横位ナデ・ロクロ成形 内面黒色処理・丹念な研磨	焼成 良好 胎土 白砂子1mm以下黒色細砂子3% 色調 褐色(2.5YR6/8)	
第5号住居址 覆土内	第17図2	黒色土器片	口径— 器高— 底径—	口縁部直線状に開く 体部下やや丸みを有する	体部横ナデ・ロクロ成形 内面丹念な研磨	焼成 良好 胎土 1mm以下白色細砂子3% 色調 褐色(2.5YR7/6)	
第5号住居址 床下土坑内1	第17図3	土師器長頸瓶	口径— 器高— 底径—	口縁部「く」字状に外反 体部下丸みを有する	口縁内部横位ハケナデ 内面横位ハケナデ 体部斜位ハケナデ	焼成 良好 胎土 1mm以下白色細砂子・黒母砂10% 色調 赤色(10R5/8)	

第V章 調査の成果と課題

第1節 久保御堂遺跡の落し穴状土坑について

1. 検出された土坑の概要

土坑の概要 検出された32基の土坑について第IV章第1節1で上面観・規模や構造(掘り方等)より大きく第I群と第II群の類型に分類してきた。その際の基準は穴の開け方(構築方法や構造)を基本とした。

縄文時代の落し穴についての調査例の初見と言われる城の平遺跡の他に、市域においては近年広域に亘る調査により数多くの遺跡から落し穴の報告がなされており、八ヶ岳西南麓における狩猟域の在り方が徐々に解明されつつある。特に榎木地区(梵天原遺跡や上見遺跡を中心する地域)では尾根単位の落し穴群が密接な関係から成立し、集団猟域の想定がなされている。

落し穴状土坑の分類 今回久保御堂遺跡において検出された落し穴はその配列等から、小規模な落し穴群と捉えることができそうである。

これらの落し穴について上面プランの平面観や坑底の規模、小孔のあり方により4種類の落し穴状土坑を認めることができた。市域において検出されたものと、本遺跡で得られたものについて坑底の規模に着目すると、本遺跡は他の遺跡と比較して大きくまとめると、長軸規模が中型で、平面観が長楕円形で2ヶ所の坑底ピットを有するものと、平面観が円形を呈し、深い掘り方を有する特徴的なものの2類型だけの割合単純な構成より落し穴群は成り立っていることを指摘できる。このことはどのような要件により生じたか類推してみると、長期に亘り落し穴群が展開したのではなく、ある程度限定した短期間に落し穴が構築されたことによるものと捉えることができよう。

落し穴状土坑の配列 落し穴状土坑の分布傾向については第IV章第2節1において概観したが、全体傾向は大きく台地を切るように横断する配列を基本としており、特に第2号・3号・4号・5号・6号・7号・8号土坑の配列は等間隔で直線状となり、この列は全て第I群より構成される。また、第14号・15号・17号・18号・20号土坑の配列は第II群1類より成立し、その配列は等間隔で直線状となる。これらの落し穴列は浅い谷を囲む形を基本としている。落し穴が一定の間隔で列を成すように配され、その配し方も台地に入り込む入り組み谷を意識していることなどを考慮すると、落し穴の列は一定の企削の基に構築されたものと捉えることができそうである。

以上のように各類型の配列状況について記述してきたが、配列の特徴をまとめると次のようになる。

1. 土坑は類型差によりその配列に相違が見られ、類型ごとに組合わさって列をなす傾向がある。
2. 土坑の長軸方向は、台地の長軸方向に対して直行する形の南西-北東方向に長軸方向をもつものが主体となるものを基本とする。
3. 土坑の配列は台地に入り込む谷を意識し、この谷を囲むように構成される列を基本とする。

上記した傾向は市域において普遍的な在り方であり、落し穴現場の設定を考える上に貴重な所見である。

落し穴状土坑の時期 第IV章第2節1で述べたように、落し穴状土坑の時期を直接示すような手掛かりを求めることはできなかったが、落し穴状土坑がある程度の時間枠の中で構築されていたことが、類型差の存在から把握することができたが、これらが一体縄文時代でもいつの時期に構築されたものであろうか。

本遺跡検出された落し穴からの情報からでは窺え知れないが、出土している縄文時代の上器より推定すると、

早期前半と中期初頭の二時期に何らかの関わりを持っていたものと考えることができよう。

特徴的な類型である第II群1類が数多く検出されている市城の遺跡の上の平遺跡の例と対比してみると、上の平遺跡では同類型は前期初頭以前に位置付けられている。また、同類型がまとめて検出されている新潟県岩原1遺跡では早期終末から前期前葉に位置付けられており、これらの点から考えて本遺跡から検出されたものも同時期のものと考えることができようか。なお、第I群については形状的に特徴が少ないために時期の限定ができないが、第I群に類似する諏訪市ジャコッパ遺跡の1区A-4号15c層・1区A-5号21層の陥し穴から検出された炭化した遺物の¹⁴C年代測定によると、前期後半から中期前半の年代である5580±190(4号)、5390±260(5号)の年代測定値が得られており、これらのデータと対比が可能であろうか。

以上のように周辺の遺跡から得られた陥し穴状土坑の年代観を概観してきたが、それによると早期末に帰属されるものと、前期末中期初頭に帰属されるものが認められ、陥し穴状土坑が幅広い時間幅の中で造られて使われていたと考えられ、単一の時期の遺構ではないことが窺えた。

2. 久保御堂遺跡の陥し穴群の性格と周辺遺跡との関係

本遺跡の性格と問題点 本遺跡の性格を陥し穴状土坑の存在より狩猟域の遺跡と単純に理解してきたが、陥し穴状土坑以外の第II群2類・3類の存在や、試掘の際に台地南西端に検出された中期初頭の住居址の在り方から考えると、この地が陥し穴＝狩猟域としただけの単純な構成を持つ遺跡ではなく、狩猟域としての面と違った側面である小規模集落との遺跡の性格の両者を持った遺跡と考えることができ、時間的な変遷から考えると、狩猟域から集落へと変容していったものと考えられる。

同様に狩猟域から小規模集落や生産域への変容する現象は、本遺跡の東側に展開する槻木遺跡群(神田頭A・B・C遺跡、中原遺跡、上見遺跡、梵天原遺跡)でも認めることができ、変化の原因を遺跡周辺の環境変化をその理由として挙げている。本遺跡の場合このような現象を端的に示すような根拠は見られないが、現象面だけを比較するならば槻木遺跡群と同様な変容を示していることより、これらの群と同様な環境変化が大きな要因であったものと推察でき得る。

小地域内における本遺跡の在り方 本遺跡周辺には師岡平遺跡、威力不動尊東遺跡や上の平遺跡が隣接するような形で立地しており、その様相はこの一帯が、一つの小地域のまとまりを有していると考えられる。このまとまりは単に遺跡分布だけ現れているだけでなく、遺構群の面にも認められる。例えば陥し穴では、本遺跡と隣接する師岡平遺跡においても本遺跡で検出された第I群、第II群1類が検出されており、その配置等の特徴には本遺跡においても確認された現象が多々見られ、本遺跡と何らかの関連を想定でき、遺構の分布状態から見ると一つの大きな狩猟域としての性格を久保御堂遺跡・師岡平遺跡・威力不動尊東遺跡の3遺跡間で保持しており、遺跡群での補充関係があったものと想定できるか。

また、この地が近縁一帯の集団の狩猟場と考えることができよう。このような狩猟域が八ヶ岳西南麓にはいくつものグループとなって存在していたものと考えられ、この狩猟域グループが小地域集団の単位と密接な関連を有していたものと考えられる。

今回の調査で得られた陥し穴状土坑の分布状況や、土坑の形状等よりこの地が集団の狩猟場の一翼を担っていたものと想定してきた。八ヶ岳西南麓にはこのような狩猟域が何箇所も存在し、これら個々の狩猟域は周辺地域集団個々の場としての性格を有するものと考えられる。

今後今回得られた情報を基に槻木地域との比較等を通じて、当時の狩猟方法や集団の在り方について考えなければならない。

第2節 平安時代における久保御堂遺跡について

今回の調査により5軒の平安時代の竪穴住居址が検出された。これらの竪穴住居址はそのカマド位置やその配列等より同時存在の一つのムラを構成するものであることが判明した。この久保御堂ムラが周辺の平安時代とどのような関連を有していたものか考えてみたい。

1. 久保御堂遺跡と周辺に位置する平安時代遺跡との関連

本遺跡の時期的位置付けと周辺遺跡との比較 本遺跡の時期的位置付けについては、検出された土器群より9世紀末頃として第IV章第3節2に詳細を記述している。また、本遺跡と同様な土器構成を有する遺跡を数箇所挙げている。この点について再度検討してみたい。

本遺跡から検出されている土器群は土師器環、黒色七器、皿、甲斐型皿、小型甕、長胴甕、甲斐型甕、武蔵型甕、軟質須恵器環、須恵器大甕であり、灰釉陶器を含んでいない点に特徴を有する。同様に灰釉陶器を持たない土器群構成を有する八ヶ岳西南麓の平安時代集落を挙げると、茅野和田遺跡西第10号住居址、⁽³⁰⁾梨ノ木遺跡第23号住居址、山寺遺跡第4号住居址、立石遺跡第11号住居址を挙げる事ができる。

上記した遺跡と本遺跡の例とについて詳細に比較検討してみたい。基本的な土器の在り方には大きな異なりは見られないが、土師器環や須恵器環の在り方等に着目すると若干の相違を下記の表のように認められる。

遺 跡 名	土師器環	甲斐型甕	武蔵型甕	須恵器環	軟質須恵器環	甲斐型皿
久 保 御 堂 遺 跡	●	●	●		●	●
茅野和田遺跡西第10号住居址	●	●	●		●	
梨ノ木遺跡第23号住居址	●			●	●	
山寺遺跡第4号住居址	●	●	●		●	
立石遺跡第11号住居址	●		●			

この表によると、梨ノ木遺跡第23号住居址を除きほぼ同様な器種構成を示している。また、他の器種に着目すると、久保御堂遺跡・茅野和田遺跡ではロクロ成形によるカキメ整形の小型甕が存在するが、梨ノ木遺跡においてはこの類の小型甕よりもナデ整形によるものが主体を占める傾向にある。須恵器環も体部が直線的に開く器形を呈し、硬質な焼成のものが含まれるなど他の遺跡とはやや異なった傾向を示している。このような差異は、上記した遺跡が近縁地に位置する点などから地域的なものとは考えられず、むしろ時期的な小差と考えることができようか。

また、甲斐型甕や武蔵型甕の流入の仕方も何らかの形で一つの時期的な示準となろうか。甲斐型甕のような他地域からの土器の流入の現象より、この地域がかなり八ヶ岳南麓の地域（山梨方面）と密接な関係を有していたことが理解できる。

これらの遺跡について時期的な位置付けを直接的に示す資料はないが、取敢えず灰釉陶器の欠如と甲斐型甕、軟質須恵器環の在り方等よりみて9世紀後半に位置付けられようか。なお、やや様相を異にした梨ノ木遺跡については他のものよりやや前出するものと捉えることができようか。

2. 平安時代における八ヶ岳西南麓への進出について

八ヶ岳西南麓における平安集落の展開 従来八ヶ岳西南麓に次々と平安時代のムラが作られてくるのは、⁽³¹⁾10世紀後半から11世紀前半とされていた。今回の例より考えると八ヶ岳西南麓への進出は9世紀後半から開

始されていたようであり、近隣にある山梨県北巨摩群八ヶ岳南麓における平安集落の展開と比較してみると、八ヶ岳南麓においても9世紀後半以降に平安集落が出現するようであり、西南麓、南麓で同様な平安集落進出の動向が認められるとすることができよう。

八ヶ岳南麓に進出した平安集落⁽³²⁾について、9世紀末以降から出現し、11世紀前半頃までに解体する点。カマド方向に共通性が認められ、集落経営に同一意識が見られる点。掘立柱建物址を伴う点。小鍛冶址を伴い集落内での鉄製農具の生産が行われている点。住居址間で重複が認められず居住区域の規制に乏しい点。が指摘されている。

これらの事例を本遺跡に当てはめてみるとかなりの部分で該当するが、本遺跡の場合9世紀後半に集落が作られ、これが継続せず再度10世紀末に再発生する点や、小鍛冶の欠落と鉄製農具の欠落、掘立柱建物址の欠落などに相違を見ることができよう。また、集落の規模も大きくない。本遺跡と同時期と思われる茅野和田遺跡、山守遺跡、立石遺跡においても同様な傾向が認められ、八ヶ岳南麓の集落の内容とやや異なった傾向を指摘できる。このような差異が何ゆえに生じたのかについては不明な部分が多いが、そこには八ヶ岳西南麓における山麓部への進出の背景と八ヶ岳南麓への進出の背景の差等を考えることができようか。

八ヶ岳山麓部への進出の背景には鉄製農具・工具の普及と農業手段・技術の向上や律令体制の崩壊に伴う荘園⁽³³⁾の増加、大規模な開墾政策に導き出された結果等が考えられているが、集落の存続時期幅、集落規模等や集落の構造から考えると、八ヶ岳西南麓の開発は南麓部における開発と比較して規模の小さなもので、開発の背景となる力も、弱小なものであったためではなかったかと考えることができようか。

上記した川件より八ヶ岳西南麓における平安時代集落の進出を考えると、9世紀後半に進出したものが11世紀前半まで連続と継続したのではなく、何段階に亘る開発の波が波状的に入り込む形が基本的な八ヶ岳西南麓の在り方ではないかと考えられる。こうした断続型の開発の仕方は八ヶ岳西南麓における生産基盤の脆弱性により生じたものとも考えることもできようか。

3. 今後の課題

今後八ヶ岳西南麓における平安時代集落の進出を考える上に、山麓部における平安時代土器の集成と編年化、平安時代遺跡の内容把握等の課題を解決しなくては成らないと考えられる。また、諏訪盆地周縁部の遺跡との関連や、八ヶ岳南麓（山梨方面）との関連と甲斐型土器の流通についても今後の大きな課題である。

今回調査された久保御堂遺跡の成果は、八ヶ岳西南麓における平安時代集落の進出の在り方について貴重な数多くの所見を与えてくれたが、その反面今後解決していかなければならない問題を数多く生んだ。今後これらの問題を徐々に解決していきたい。

第VI章 結 語

古田地区は八ヶ岳西南麓においても古くから開発された集落で、13世紀中頃の文献『祝詞段』にも古田として記載され、中世後半には長田・古田・村岡の三つの集落から成り立っていたことが文献から窺える。このようにこの地区は八ヶ岳西南麓においても村の発展の仕方が連続と追える地域として興味深い地域である。また、墓制にも両墓制が残り、塚墓の位置についても特有な傾向が窺われるなど割合古様相を残しており、民俗学的な見地からも興味深い地域と言える。

古田地区における県営伽場整備事業に伴う埋蔵文化財の調査は、平成6年度から開始され、平成8年度までの3年間に亘って上の平遺跡（平成6年度調査）、久保御堂遺跡（平成7年度調査）、師岡平遺跡（平成8年度調査）の3か所の発掘調査が行われた。その結果以前は不明確であった人景山西側一帯小地域の縄文時代・平安時代の様相が明らかになりつつある。特に縄文時代においては落し穴による狩猟域の確認がなされ、平安時代においては9世紀後半八ヶ岳西南麓に開発に進出してきた村の在り方を把握することができた。

調査の結果、この一帯は独立した地根ごとに久保御堂遺跡・師岡平遺跡・威力不動尊東遺跡が隣接するように展開していることが把握された。各遺跡から縄文時代中期初頭の遺物・遺構が検出されており、この地域が中期初頭の遺跡群形成していることが把握された。また、これらが単に密集といった現象面だけでなく、遺跡間で相互関係を持っていたことが落し穴の配列や、同類型の落し穴の検出より窺うことができた。

平安時代においては小さくまとまった9世紀後半の集落をほぼ全域に亘り調査することができ、入り組み谷を水田耕作地に、台地上を雑穀栽培を目的とした耕地に比定しており、山麓部の平安時代の村の様相を近間見ることができた。このような平安時代における八ヶ岳西南麓部への開発の在り方は在地系領主層の積極的な私有地拡大策に乗じて展開されたと考えられている。久保御堂遺跡の発生もそうした動きとは無縁のものではないと考えられるが、9世紀以降に集落が一旦消えた後に10世紀後半に再び蘇生する在り方は、数度に亘る開発の波があったことが窺え、言い替えるならば、最初の開発進出→撤退→再進出といったことが繰り返されて八ヶ岳西南麓の開発は進んでいったものと考えられるのではないかと。

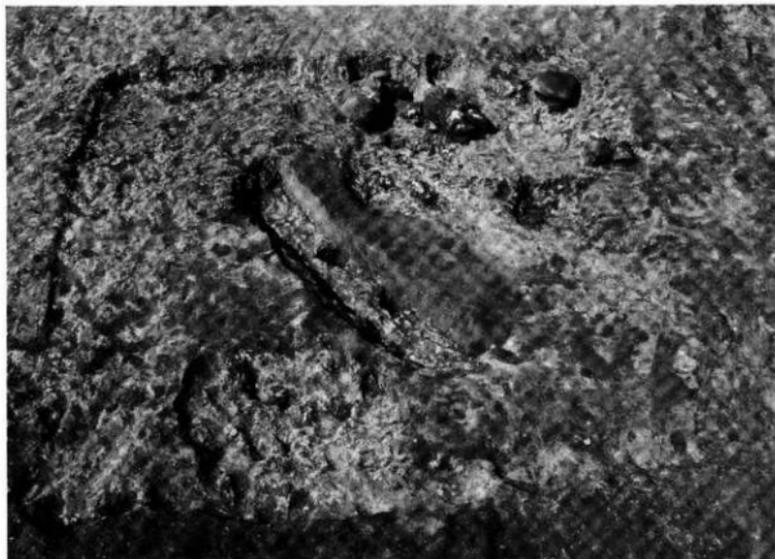
中世後半大空期の資料も検出され、この地が中世における生活の舞台であったことが確認されたが、立地的な環境より考えると、近接する中世村落跡である師岡平遺跡と密接な関係を有していたものと考えられる。また、字名等を考慮すると、口伝等に残る古田七堂の一つ久保見堂に関係を求めることができようか。

近世の陶磁器については、19世紀後半の八ヶ岳西南麓の用水汐開削事業による農地拡大傾向を示す資料と考えられ、小片と雖も重要な歴史的背景を有しているものと捉えることができよう。

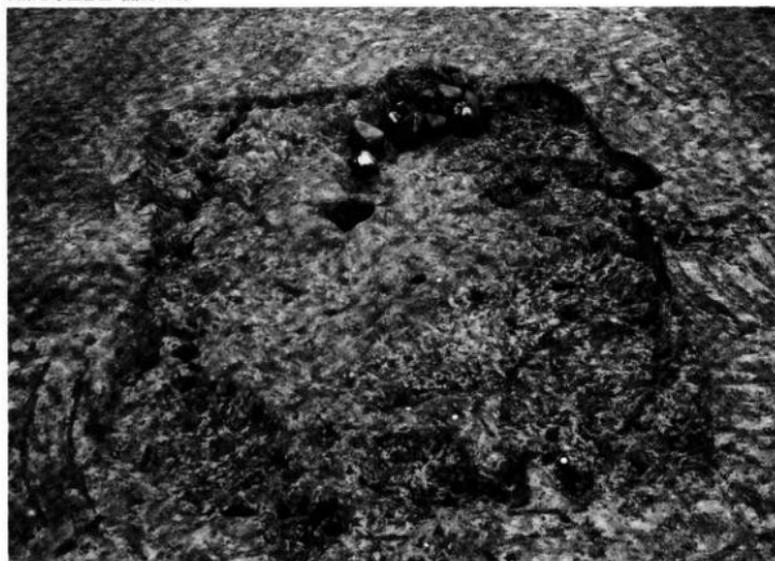
現在古田地区周辺における埋蔵文化財の調査は徐々に進行しつつあり、多くの情報が蓄積されつつある。今後これらの情報を詳細に検討する必要がある。古田の小地域がどのような変遷を遂げてきたか、地域内の遺跡間の相互関係はどのようになっているのかについて、現在までに得られている成果を加えて再度考えていかなければならない。

(註・参考文献)

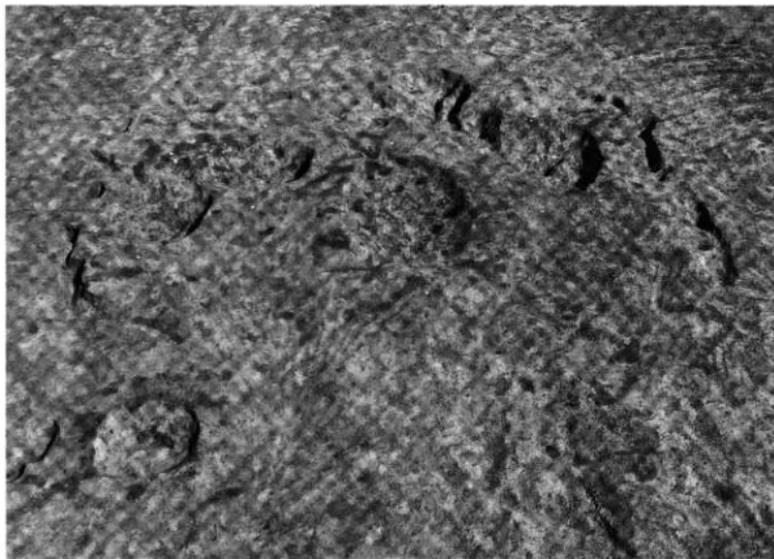
- (1) 宮坂 英一 1936「宋鏡発掘記」『ミネルヴァ』9月号第1巻第7号
- (2) 宮坂 虎次 1986「第2章縄文時代第2節八ヶ岳西南麓の遺跡」『茅野市史上巻』茅野市
- (3) 未報告
- (4) 未報告
- (5) 功刀 司 1995「上の平遺跡」茅野市教育委員会
- (6) 試掘調査報告による。
- (7) 平成8年度から調査中で、中世の掘立柱建物を中心とする村落跡や落し穴群が検出されている。
- (8) 試掘調査報告による。
- (9) 宮坂 光昭 1991「諏訪地方平安時代小遺跡の考察」『諏訪市史研究紀要第3号』諏訪市教育委員会
- (10) 柳川 英司 1994「第IV章調査の結果と課題 第1節神田頭C遺跡周辺における平安時代後期の散在住居址群について」『神田頭C遺跡』茅野市教育委員会
- (11) 柳川 英司 1994「第III章発掘され付託と遺物 2 平安時代の遺構と遺物」『立石遺跡』茅野市教育委員会
- (12) 小林 深志 1990「第III章発掘された遺構と遺物 第5節平安時代の遺構と遺物」『棚畑』茅野市教育委員会
- (13) 今村 啓賢 1973「第2部考察編 霧ヶ丘遺跡の土壌群に関する考察」『霧ヶ丘 霧ヶ丘遺跡調査団』
- (14) 小島 一夫・小島正裕 1994「復林「207タイプ」土坑について」『東京考古12』東京考古学会
- (15) 佐藤 俊幸 1992「第III章岩原 遺跡 3.遺構 A.陥穴状土坑」『開地自動車道関係発掘調査報告書 岩原I遺跡 上林塚遺跡』新潟県教育委員会
- (16) 常盤井智行 1992「第2章遺構BⅡ類土坑」『国営飯山山地開発関係遺跡発掘調査報告書-鳴沢・鳴沢頭・カササギ野池・休場・下境大塚遺跡-』飯山市教育委員会
- (17) 小杉 康 1987「第5章縄文遺跡押型土器群の研究」『縄文押型土器調査研究報告書』岡谷市教育委員会
- (18) 三上 肇也 1987「契久保式土器 再考」『長野県埋蔵文化財センター-紀要1』長野県埋蔵文化財センター
- (19) 柳川英司氏が神田頭A-C遺跡、鴨田遺跡検出の黒色土器高台付環に見られる特徴的な暗文について「ススキ状暗文」と称している。
- (20) 瀬田 正明 1992「1.甲斐型土器の定義 III.「甲斐型土器」山梨県考古学協会
- (21) 保坂 康夫 1992「1.甲斐型土器の定義 要(大形)」『甲斐型土器』山梨県考古学協会
- (22) 河西 清光 1970「第IV章遺物 第5節土師器・須恵器」『茅野和田遺跡』茅野市教育委員会
- (23) 宮坂 虎次 1981「VI 遺物」『山寺遺跡』茅野市教育委員会
- (24) 菅沢 浩 1976「3 十二ノ后遺跡 4)まとめ ウ 奈良・平安時代の土器について エ) 十二ノ后遺跡の年代比定」『長野県中央遺蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-諏訪市その4』長野県教育委員会
- (25) 伊藤 蓋 1989「第7章成果と課題 第2節吉田川西遺跡にみられる食器の分布」『中央自動車道長野緑地蔵文化財発掘調査報告書 吉田川西遺跡』長野県教育委員会
- (26) 藤澤 良祐 1986「IX.総括 瀬戸大塚の編年的研究-3.型式学的研究」『瀬戸市民俗資料館研究紀要V』瀬戸市歴史民俗資料館
- (27) 藤澤 良祐 1987「付録 本郷業の研究(I) III.本郷業の変遷(I)」『瀬戸市民俗資料館研究紀要VI』瀬戸市歴史民俗資料館
- (28) 守矢 昌文 1996「第V章調査の成果と課題 第1節梵天塚遺跡の落し穴状土坑について」『梵天塚遺跡』茅野市教育委員会
- (29) 辻本 崇夫 1988「IV.遺構と遺物 4.陥し穴状遺構の機能した時期と遮蔽物として利用された植物 (2)遺構の機能した時期」『ジャコフパパラ I』諏訪市教育委員会
- (30) 平成8年度発掘調査され、現在遺構整理中のものを見つけた。
- (31) 白田 武正 1986「第2章古代の集落 第2節考古学からみた古代の茅野」『茅野市史上巻』茅野市
- (32) 萩原 三雄 1986「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」『山梨県考古学論集』山梨県考古学協会
- (33) 宮坂 光昭 1985「第二編原始時代 第三章 原始・古代の原村の歴史」『原村誌上巻』原村



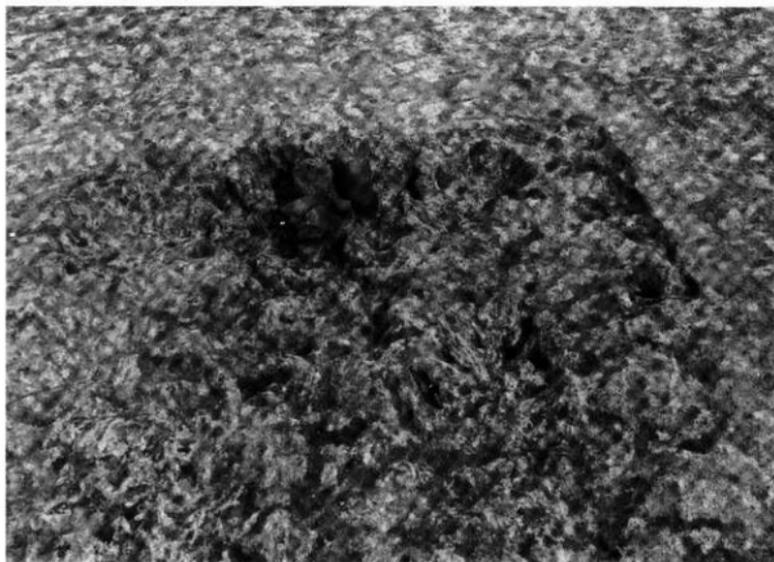
(2)第 1 号住居址 (南側から)



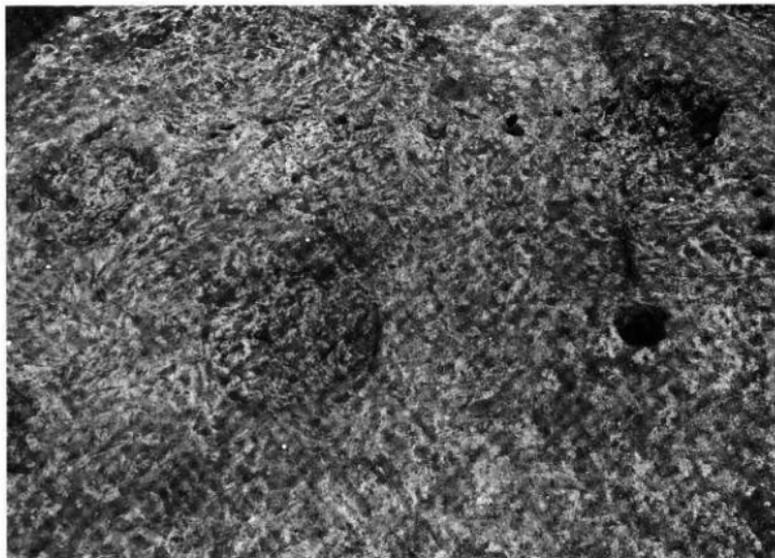
(3)第 2 号住居址 (南側から)



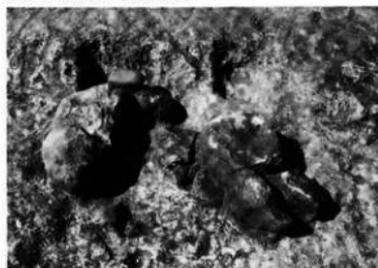
(4)第 3 号住居址 (南側から)



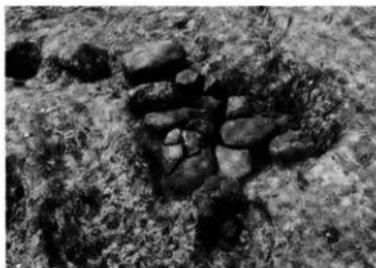
(5)第 4 号住居址 (南側から)



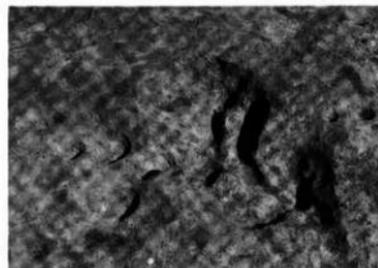
(6)第 5 号住居址 (南側から)



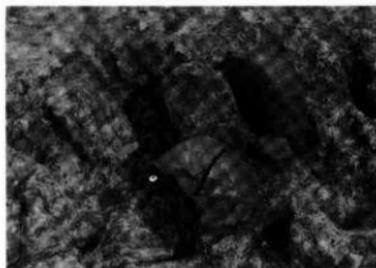
(7)第 1 号住居址カマド



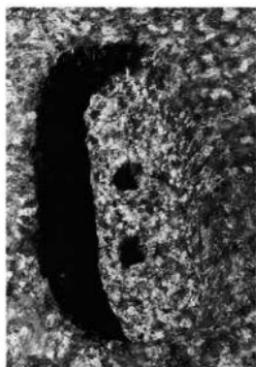
(8)第 2 号住居址カマド



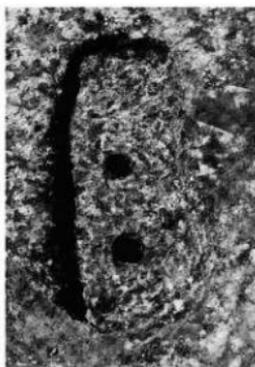
(9)第 3 号住居址カマド



(10)第 4 号住居址カマド



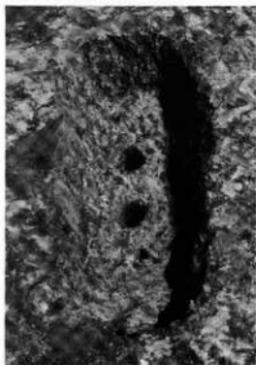
02第 2 号土坑



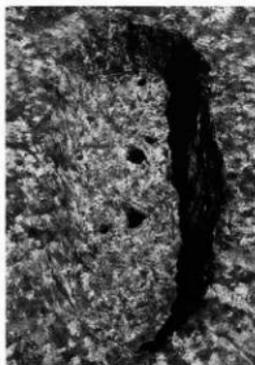
03第 3 号土坑



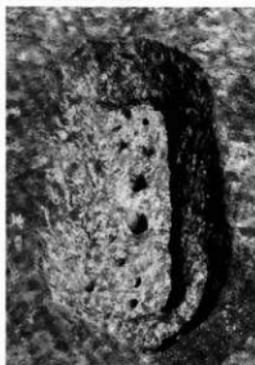
03第 3 号土坑の規模



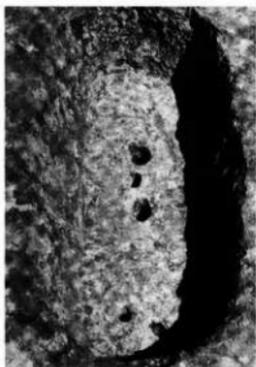
04第 4 号土坑



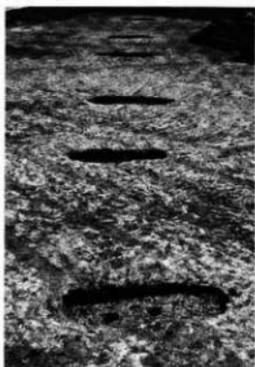
05第 5 号土坑



06第 6 号土坑



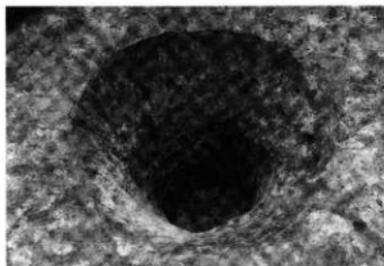
07第 7 号土坑



03第 3 号土坑から 8 号土坑



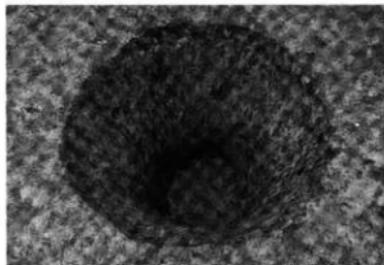
03南北方向に横に並ぶ土坑



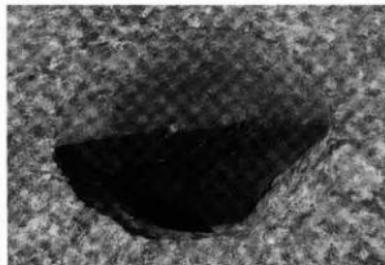
09第14号土坑



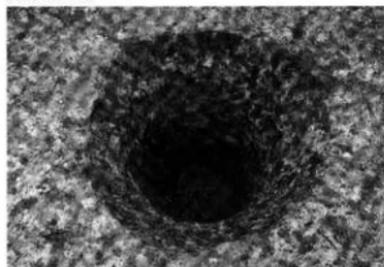
09第14号土坑の規模



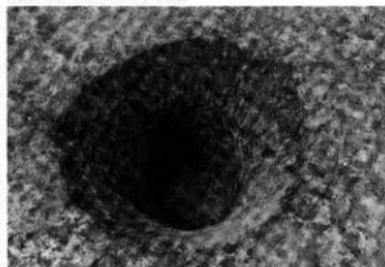
08第15号土坑



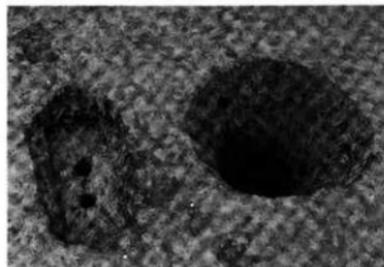
08第15号土坑土層堆積状態



06第17号土坑



07第18号土坑



05第21号・20号土坑



07南北方向に並ぶ土坑

報告書抄録

ふりがな	くぼおどういせき							
書名	久保御堂遺跡							
副書名	平成7年度県営園場整備事業古田地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者者名	守矢昌文							
編集機関	茅野市教育委員会							
所在地	〒391 長野県茅野市塚原二丁目6番1号 TEL.0266-72-2101							
発行年月日	西暦1997年 3月24日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くぼおどういせき 久保御堂	ながのけんまのし 長野県茅野市 ふるた 古田 くぼおどういせき 久保御堂	20214	313	36度 00分 10秒	138度 12分 20秒	19951024～ 19951127	4,682	県営園場古 田地区に伴 う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
くぼおどういせき 久保御堂	生産域 集落址	縄文 平安	落し穴状 遺構 17 土坑 14 竪穴住居址 5	押型文土器・剥片 磨石・打製石斧 中期初頭土器片 須恵器坏 土師器坏・長割甕 中世大窯志野丸皿 灰輪丸碗 近世広東茶碗		縄文時代の落し穴群を もつ生産域 平安時代の集落址 中世散布地		

久保御堂遺跡

—平成7年度県営園場整備事業古田地区に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成9年3月21日 印刷

平成9年3月24日 発行

編集 茅野市教育委員会

発行 茅野市教育委員会

長野県茅野市塚原2丁目6番地1号 (0266)72-2101(代)

印刷 有限会社 森仙印刷所

長野県茅野市本町西3-1 (0266)72-2259
